

### 「信用と架空資本」（『資本論』第3部第25章）の草稿について（中）第3部第1稿第5章から

OTANI, Teinosuke / 大谷, 禎之介

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

51

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

49

(発行年 / Year)

1983-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008446>

# 「信用と架空資本」(『資本論』第3部 第25章)の草稿について(中)

——第3部第1稿第5章から——

大谷 禎之介

## 目 次

はじめに

1. 草稿第5章の外的状態
2. 草稿第5章の執筆時期
3. エンゲルスの編集作業の経過
4. エンゲルスの編集作業の内容
5. 草稿第5章と現行版第5篇との対応
6. 草稿第5章の5)と現行版との対応
7. 現行版第26章の表題と性格
8. 「架空資本」の意味
9. 草稿と現行版第25章との対応……(以上, 前号所載)
10. 第25章および第26章冒頭の草稿……(本号所載)
11. 草稿によって見た第25章の内容
12. 「商業信用」について
13. 「銀行信用」について

むすびに代えて

### 10. 第25章および第26章冒頭の草稿

本節では、第25章と第26章のはじめの部分(MEW, Bd. 25, S. 432, Z. 21まで)とに用いられた、草稿317ページ1行目—322ページ1行目の全文を訳出する。全体を大きく、「A. 本文と注」と「B. 雑録」との

## 2 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

2つに分ける。前者では、本文の各パラグラフとそれへのマルクスの注を収める。前節第3表に見られるように、注部分のなかでも、さらに雑録部分のなかでも、マルクスは追加の注をいくつか書いているが、これらはすべて関係するパラグラフの後に移し、そのことを訳者注に記しておく。また、草稿では連結記号をつけ、続きを離れたところに書いている場合にも、ここでは原則として続けて掲げ、草稿での状態を注記する。総じて、前節第3表(同表で下線をつけた引用は現行版に収められていないものである)と本節の訳注とで、草稿での各部分の状態は容易に再現できるであろう。

訳文にはエンゲルス版(MEW版)との相違を注記する。ただし、注と雑録とのなかの引用の部分は、マルクスが草稿に書いているとおりに訳出するので、引用文献とのあいだに違いがある場合や、現行版でのドイツ語訳とのあいだに微妙な違いがある場合があるが、それらをいちいち注記すると煩瑣になるので、違いがとくに大きい場合だけ注記する。『議会報告書』の証言録からの引用で、マルクスはときどき、証人への質問をあたかも証言そのものであるかのように要約したりしているが、これもいちいち注記することはしない。注記する相違の範囲や用いる記号類は前稿(「貨幣取扱資本」(『資本論』第3部第19章)の草稿について)、『経済志林』第50巻第4号)のものと基本的には同じである<sup>1)</sup>。ただ、マルクスの使っている角括弧を前稿でのようにブラケット [ ] にすると、筆者の挿入を示すキッコー [ ] とまぎらわしいことがわかったので、マルクスの角括弧は弓括弧 { } で示すことにし、また、マルクスによる注の注番号は、筆者注のそれと一見して区別できるようにするため、ゴシック体にするようにした。

- 1) 筆者注には、訳文に変更が生じるものだけでなく、同じ意味の別の単語による置き換え、文章構造の大きな変更、括弧類の変更、なども含まれる。しかし、次のようなものは煩瑣になるだけだと思われるのでいちいち注記しない。——正書法上の変更、語順の局部的変更、人称変化・格変化の訂正、定冠詞の挿入・削除、前置詞などの文体上の反復挿入、指示詞の変更、名詞の代名詞・指示詞への変更とその逆の変更、意味に関係のない句読点の変更、

語句の局部的変更。

あとから（といても直後であることもありうる）書き込まれたことがわかる語句は《 》で示す。

{ } は草稿中の角括弧, [ ] は筆者の挿入である。

草稿ページは次の記号（MEGA および大月書店版『資本論草稿集』での記号にいくらか手を加えたもの）で示す。ここでの数字および語句はもちろん例示のためのものである。

| 320 | daß... ここから320ページが始まる。

/320/ Es... ここから320ページの中途の或る部分が始まる。

...so| ここまでのページが終わる。

...ist./ ページの途中でいったん切ることを示す。つまり、ここまでのページにはさらに続く部分があることを示す。

以上の4記号は、それぞれ単独で現われるほか、次のような組み合わせで現われることになる。

...so|| 320 | daß... so でここまでのページが終わり、daß から320ページが始まる。

...ist./320/Es... ist. でここまでのページが終わり、Es から320ページの中途の或る部分が始まる。

...ist./320| Es... ist. までのページにはまだ続く部分があるが、ここでは ist. で取るのをやめる。次の Es 以下は320ページからのものである。

...ist./320/Es... ist. までのページにはまだ続く部分があるが、ここでは ist. で取るのをやめる。次の Es 以下は320ページの中途からのものである。

今回本稿で紹介する部分では、317ページと318ページとは上半部と下半部とが別々に使われており、319ページと320ページとはページを通して使われている。上半部と下半部とが別々に使われている場合には、それぞれを区別して|317上|、|317下|のように示すことにする。ページの終りないし中途を示す上記の記号、|や/も、ここでは上半部あるいは下半部の終りないし中途を意味する。

また、今回は草稿中の若干の部分の動かしたりするので、各部分が草稿でどのような順序で書かれているのかをわかり易く示すために、ページの指示の直後にその順序を丸つき数字で示しておく。たとえば、317ページの下半部にあるものは、|317下|① から丸つき数字を辿って行って、/317/⑦からの部分の末尾の|でこの下半ページの終りを確認できる。この丸つき数字で区

#### 4 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

別する各部分は、本文ではパラグラフごとであるが、注および雑録では、ひとまとまりのものともみなされる部分であって、パラグラフの切れ目とは一致していない。

なお、ページの変わり目が文の中途である場合には、後のページの最初の語の直前をその変わり目とみなした。

草稿とエンゲルス版との相違および草稿の状態についての注記は、1)、2) 3)…の注番号を付した注で行なう。相違は、草稿訳文をまず掲げて、それがエンゲルス版でどのようになったかを記す、というしかたで示す。すなわち、「A→B」は、草稿中のAがエンゲルス版でBに変わったことを示し、「A—削除」は、エンゲルス版でAが削除されたことを、「ここにAを挿入」は、エンゲルス版でAが挿入されたことを示す。訳語のあとに原語で「A→B」となっているだけのものは、原語はAからBに変えられているが訳語としては変えるまでもない、という場合である。

訳語などについては、アスタリスク(\*)による注を上の筆者注のあとに置いた。

以上のような特殊な記号を使うことが煩わしさを増幅させることをよく承知してはいるが、草稿の状態を紹介するためにはこの程度のことはやむをえないと考えている。

以下、エンゲルスによって生前刊行された、1894年のマイスナー版を、「1894年版」と略称する。

### A. 本文と注

|317上|① 5)<sup>1)</sup> 信用。架空資本。<sup>2)</sup>/

1) 「5)」→「第25章」

2) 「信用。架空資本。」→「信用と架空資本」

/317上/② 信用制度とそれが自分のためにつくりだす《信用貨幣などのような》諸用具<sup>1)</sup>との<sup>2)</sup>分析は、われわれの計画の範囲外にある。ここではただ、資本主義的生産様式一般の特徴づけのために必要なわずかの点をはっきりさせるだけでよい。そのさいわれわれはただ商業信用<sup>3)</sup>だけを

取り扱う。この信用の発展と公信用の発展との関連は考察しないでおく。/

- 1) 「それが自分のためにつくりだす\*信用貨幣などのような 諸用具\*\*」 → 「それが自分のためにつくりだす諸用具 (信用貨幣など)」
- 2) ここに「詳細な [eingehende]」を挿入。
- 3) 「商業信用 [d. commerciale Credit]」 → 「商業・銀行業者信用 [der kommerzielle und Bankierkredit]\*\*\*

\* 「それが自分のためにつくりだす」の原語は *die es sich schafft* である。ここでの *sich schaffen* をこのように読むかぎり、ここで言われている「諸用具」には、信用制度の形成以前からすでに存在していて信用制度がそれを自らの「用具」として取り込む商業手形は含まれないということになるであろう。*sich schaffen* はここでは *sich verschaffen* とほぼ同意、すなわち「手に入れる」、「調達する」、「自分のものとする」のような意味であって、「諸用具」には商業手形もはいるのではないかと考えられるが、十分に根拠があるわけではないので、従来 of 訳に従っておく。

\*\* 「諸用具 [Instrumente]」はもちろん *instrument of credit* (信用証書) のことだと考えることができる。そのかぎりでは「諸証券」ないし「諸証書」と訳することができるであろう。しかし、ここではもっと一般的に、信用制度が「自分のためにつくりだす」し、あるいは「自分のものとして用いる」用具」というニュアンスが含まれているように思われるので、「諸用具」としておく。なお、備忘的に記せば、*OED.* では、*instrument* の「証書」としての語義は次のように説明されている。“5. *Law.* A formal legal document whereby a right is created or confirmed, or a fact recorded; a formal writing of any kind, as an agreement, deed, charter, or record, drawn up and executed in technical form, so as to be of legal validity.” そして、第3部第1稿が書かれたのとほぼ同じ時期の1866年の用例として、Arthur Crump, “A practical treatise on banking, currency and the exchanges”, 1866 から、次の文があげられている。“where an instrument is drawn in a careless way, in the form of a promissory note, and accepted, and indorsed as a bill of exchange.”

\*\*\* エンゲルス版の *der kommerzielle und Bankierkredit* は、ふつう「商業信用と銀行信用」と訳されてきている。この個所だけを取れば、もちろん誤訳とは言えないだろう。しかし、すぐ次に続く「この信用の発展」は、エンゲルス版でもマルクスの原文である *dessen Entwicklung* のままになっている

## 6 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

る。つまり *dessen* と単数形で受けているのであって、「これらの信用の発展 [*deren Entwicklung*]」には変えられていないのである。このことからみると、エンゲルスはマルクスの原文の「商業信用」に「および銀行業者信用」というもうひとつ別の「信用」をつけ加えたのではなくて、マルクスの言うことでの「商業信用」の意味するものを敷衍するぐらいの気持ちで *und Bankier-* を挿入したのだ、と見ることもできるかもしれない。そこで、「商業・銀行業者信用」としておいた。また、後出(1318上|①の部分の2行目)の「銀行信用 [Bank credit]」と区別するために、*Bankierkredit* (1894年版では *Bankier-Kredit*) は「銀行業者信用」とした(「銀行信用」については、のちに「13. 「銀行信用」について」で触れる)。

/317上/③ 私は前に<sup>1)</sup>、どのようにして単純な商品流通から支払手段としての貨幣の機能が形成され、それとともにまた商品生産者や商品取扱業者のあいだに債権者と債務者との関係が形成されるか、を明らかにした。<sup>a)</sup> 商業が発展し、ただ流通だけを考えて<sup>2)</sup> 生産を行なう資本主義的生産様式が発展するにつれて、信用制度のこの自然発生的な基礎は拡大され、一般化され、仕上げられていく。だいたいにおいて貨幣はここではただ支払手段としてのみ機能する<sup>3)</sup>。すなわち、商品は、貨幣と引き換えにではなく、書面での一定期日の支払約束<sup>4)</sup> と引き換えに売られるのであって、<sup>6)</sup> この支払約束をわれわれは<sup>7)</sup> 手形という一般的範疇のもとに包括する<sup>8)</sup> ことができる。これらの<sup>9)</sup>手形は、その支払満期<sup>10)</sup>にいたるまで、それ自身、支払手段として流通するのであり、またそれらが本来の商業貨幣をなしている。<sup>b)</sup>「およびbe」それらは、最終的に債権債務の相殺によって決済されるかぎりでは、絶対的に貨幣として機能する<sup>11)</sup>。というのは、《この場合には》貨幣へのそれらの<sup>12)</sup>最終的転化が生じないからである。生産者や商人のあいだで行なわれるこれらの《相互的な》前貸が信用制度<sup>13)</sup>の本来の基礎をなしている「c)」ように、彼らの流通用具である手形が本来の信用貨幣、銀行券流通<sup>14)</sup> 《等々》の基礎をなしているのであって、<sup>15)</sup> これらのものの土台は、貨幣《流通》(金属貨幣であろうと国家紙幣であろうと)<sup>16)</sup>ではなくて、手形《流通》なのである<sup>17)</sup>。d)<sup>18)</sup>/

1317下|① a) 『経済学批判』云々、122ページ以下。<sup>19)</sup>/

/317下/⑤ 注 a)に。<sup>20)</sup>《318ページを見よ。注 a)に。トゥック。<sup>21)</sup>》「貨幣での即時払いによって処理されるのでないすべての取引は、厳密には、信用取引または掛売買 [a credit or time bargain] である。」  
 (『通貨理論論評。スコットランド人民への書簡のかたちで、云々、  
 イングランドの1銀行家著、エディンバラ、1845年、29ページ。])<sup>22)</sup>/

1318下|① 注 a)に。<sup>23)</sup> トゥックは信用一般について次のように言っている。「信用とは、その最も簡単な表現においては、その根拠が十分であろうと薄弱であろうと、ある人をして、ある金額の資本を他の人に、貨幣のかたちかまたは合意された貨幣価値で計算された財貨のかたちで委ねさせるにたりる信頼であって、その資本額はどちらの場合にも、定められた期限の満了時に支払われるべきものである。資本が貨幣で貸付けられる場合、すなわち銀行券か当座貸越[cash credit]か取引先あての手形で貸付けられる場合には、支払われるべき額に加えて、100ポンドについていくらという、資本の使用にたいする追加がなされる。商品の場合には、販売を構成するのであって、その価値は貨幣で換算して合意されているのであり、返済されるべき約定金額には、定められた支払期間の満了までの資本の使用にたいする報酬とそれまでの危険にたいする報酬とが含まれている。これらの信用には、たいてい、満期日を定めた支払約束書が付随しているが、これらの譲渡可能な債務証書あるいは約束手形は、貸し手たちが自分のもっているこれらの手形が満期になる以前に貨幣なり商品なりのかたちで自分の資本を使用する好機を見いだすときには、彼らがより低い条件で借りたり買ったりすることができるための手段となる。というのは、彼ら自身の名前に加えて手形に裏書きされる名前によって、彼ら自身の信用が強化されるからである。」(『通貨原理の研究』、87ページ。)/

/317下/③<sup>24)</sup> b) リーサム。「私の見るところでは、1839年全年の手形



8 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

総額は〔リーサムは〕外国〔為替〕手形を全体の約5分の1としている〕528,493,842ポンドであり、同じ年に同時に流通した手形の金額は132,123,460ポンドである。(56ページ。)(リーサム、ウィリアム、銀行業者。『通貨についての手紙』、第2版、ロンドン、1840年。)  
「手形は、通貨のうちで、それ以外のすべての成分の合計よりも大きい額の成分である。」(3ページ以下。)  
「為替手形というこの巨大な上層建築は、銀行券と金との額によって形成された土台の上に立っている(!)。そして、ろもろの事件によってこの土台があまり狭くなりすぎると、この上層建築の確定性もその存在そのものさえも、危険にさらされるのである。」(同前、8ページ。)  
「通貨の総額と要求払いのイングランド銀行および地方銀行業者たちの債務額とを推定すれば、私は、法律上金に兌換される153百万という額を見出す、これにたいして、この要求に応じるための金は14百万である。」(同前、11ページ。)  
「貨幣の膨多を阻止し、また、その1部分を生みだしてこの大きな危険な膨張を助長する低い利子率や割引率を阻止しないかぎり、手形を統制下に置くことはできない。どれだけの部分が実際の売買契約や販売のような真正の〔bona fide〕取引から生じたものか、またどれだけの部分が架空なもの〔fictitious〕で単なる融通手形であるか、すなわち、架空な資本〔a fictitious capital〕を調達するために手形が他の流通中の手形の支払いに振り出されるような場合、つまりそれだけの通貨が創造されることによるものであるか、を決定することは不可能である。貨幣が膨多で安いときには、/317下/① 私の知るところでは、後者は巨大な額にのぼるのである。」(リーサム、同前、43、44ページ。)|

/317下/② b\*)<sup>25)</sup> 「その他のすべての信用形態は」(手形等々、《小切手》は——それら《自身》が相互的な債権の清算に役立つのでないかぎりは、あるいは銀行券のように貨幣に代わって流通するのでないかぎりは——)「ただ貨幣の役目〔office〕を、売られた諸商品の所有権

を移転するという役目から、それらの商品を表わしている債権を清算するという役目に変えるだけである。」(323, 326ページ) G. オブダイク『経済学に関する一論』, ニューヨーク, 1851年。「けれども, ある当事者が自分の債権者への債務を清算するのに自分の債務者の手形 [note] をもってするような, あるいは, この手形を財貨の購買に使用するような, 若干の場合 [がある]。これらの, また類似の便法では, 信用は貨幣の代理者 [substitute] である。」(同前。)「手形《(その割引)》によって, 商人は信用を与えることができ, 自分の資本になんらかの追加をする必要なしに, 自分の取引を拡大することができる。」(J. W. ギルバート『銀行業の歴史と理論』, ロンドン, 1834年。[151ページ] [ ]) <sup>26)</sup>/

/317下/⑥ 注 a および b に。<sup>27)</sup> 「預金が貨幣であるのは, ただ, 貨幣の介入なしに財産を人手から人手に移転することができるかぎりでのことである。」(J. W. ボウズンキット『金属通貨, 紙券通貨, 信用通貨』, ロンドン, 1842年, 82ページ。「預金は, 銀行券または铸貨がなくても創造されることができる。たとえば, 銀行家が不動産所有証書等々を担保として6万ポンドの現金勘定を開設する<sup>28)</sup>。彼は自分の預金に6万ポンドを記帳する。通貨のうち, 金属と紙との部分の量は変わらないままだが, 購買力 [power of purchase] は明らかに6万ポンドの大きさまで増加されるのである。」(同前, [82-]83ページ。)<sup>29)</sup>「各営業日に手形交換所で決済される諸支払の平均額は300万ポンドを越えるが, この目的のために必要な日々の貨幣準備額は20万ポンドそこそこである。[ ]」(同前, 86ページ。)<sup>30)</sup>「手形は, 裏書きによって所有権を人手から人手に移転するかぎりでは, 疑いもなく, 貨幣からは独立した通貨である。[ ]」(同前, 92, 93ページ。)(手形は, 最終的に現金で支払われるのでないかぎり, 手形交換所を通らなければならず, また, 預金と合致することになる。)<sup>31)</sup> [ ] 平均して言えば, 流通中の手形のそれぞれには2つの裏書きがあり, したがってど

10 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

の手形も満期になるまでに平均して2つの支払を果たすとみなしてよい。この想定によれば、1839年中に、裏書きだけによって528百万ポンドの2倍、すなわち1,056百万ポンド、1日平均300万ポンド以上の価値まで、手形によって所有権が持ち手を変えたと思われる。それゆえ、為替手形と預金とを合わせれば、それらは貨幣の助力なしに人手から人手に財産を移転することによって、毎日少なくとも18百万ポンドの金額までは貨幣の機能を果たしていることは確かである。(同前、93ページ。)/

/317下/④ c) 「どの国でも信用取引の大部分は産業上の関係の領域そのもののなかで行なわれる。……原料の生産者は、原料を加工しなければならぬ製造業者から、満期日に支払われる債務証書 [obligation] を受け取って、製造業者に原料を前貸しする。この後者は、彼にかかわる仕事をなし終えたのち、この加工済みの材料を今度は彼が、また同じ条件で、誰かこれをさらに加工しなければならない他の製造業者に前貸しするのであって、こうして信用は次々に広がって行き、消費者にまで達する。卸売商人は小売商人に商品の前貸をするが、彼自身もそれ以前に製造業者ないし仲買人から商品の前貸を受けている。だれもが一方の手で借り、他方の手で貸す、それは貨幣のこともあるが、生産物であることのほうがはるかに多い。このようにして、産業上の関係のなかで、互いに結びつき縦横に交錯するもろもろの前貸の絶えまない交換が行なわれる。信用の発展は、とりわけ、このような相互の前貸の倍増にあるのであり、またここにこそ、信用の力の真の所在があるのである。」(シャルル・コ克蘭『産業における信用と銀行について』、『ルヴェ・デ・ドゥ・モンド』、第31巻、1842年、797ページ。)/

- 1) ここに「(第1部第3章第3節b)」を挿入。
- 2) 「ただ流通だけを考えて[nur für d. Circulation]」→「ただ流通だけを念頭において [nur mit Rücksicht auf die Zirkulation]」

- 3) 「機能する」functionirt→fungiert
- 4) エンゲルス版では、コンマで次の文につながっている。
- 5) 「支払約束」—promise of paying と書いたすぐ上に, Zahlungsversprechen と書かれている。エンゲルス版では Versprechen der Zahlung となっている。
- 6) 原文では、これ以下の部分は関係文となっているが、エンゲルス版では独立の文にされている。
- 7) ここに「すべて [sämtlich]」を挿入。
- 8) 「包括する [subsumiren]」→「総括する [zusammenfassen]」
- 9) 「これらの [diese]」→「このような [solche]」
- 10) 「支払満期 [Zahlungsfälligkeit]」→「満期支払日 [Verfall- und Zahlungstage]」
- 11) 「機能する」functioniren→fungieren
- 12) 「それらの [derselben]」—削除。
- 13) 「信用制度 [Creditwesen]」→「信用 [Kredit]」
- 14) 「銀行券流通 [Banknotencirculation]」→「銀行券 [Banknoten]」
- 15) 原文では、これ以下の部分は関係文となっているが、エンゲルス版では独立の文とされている。
- 16) 「貨幣《流通》(金属貨幣であろうと国家紙幣であろうと) [Geld《circulation》(sei es metallisches od. Staatspapiergeld)]」→「金属貨幣の流通であろうと国家紙幣の流通であろうと、貨幣流通 [Geldzirkulation, sei es von metallischen Geld oder Staatspapiergeld]」
- 17) 「これらのもの土台」以下の部分は原文では次のようになっている。deren Basis nicht d. Geld《circulation》(sei es metallisches od. Staatspapiergeld), sondern d. Wechsel《circulation》. この部分はエンゲルス版では次のようになっている。「これらのものは、金属貨幣の流通であろうと国家紙幣の流通であろうと、こうした貨幣流通にもとづいているのではなくて、手形流通にもとづいているのである。[Diese beruhen nicht auf der Geldzirkulation, sei es von metallischen Geld oder von Staatspapiergeld, sondern auf der Wechselzirkulation.]」
- 18) この注番号「d)」に対応する注は書かれていない。ただ、前出の注「注 a および b に」の左方欄外に注番号「d)」がみられるが、ここに引かれた縦線がこの上を通っている。この縦線は「d)」の抹消線かもしれない。
- 19) この注は削除されている。そのかわり、前出の注1)に記した『資本論』第1部への参照指示が挿入された。

12 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

この注の左側にはインクで縦線が引かれている。それは続く注 b)<sup>a)</sup>, b),  
そして c) の最後の行まで延びており、最後のところは右に曲げられて、c)  
の末行をやや包み込むようなかたちになっている。

- 20) この注「注 a) に」は注「c)」のあとに書かれているが、ここに移した。
- 21) あとから書き加えられたこの部分で「318 ページ」としているのは草稿の  
次ページであり、そこにはトックからの引用を収めた注「注 a) に」があ  
る。この注はすぐ次にもってくることにする。
- 22) この注は削除されている。
- 23) 前出注 21) を見よ。318 ページの下半部はここから始まる。
- 24) 以下の注「b)」は次の「b<sup>a)</sup>」のあとに書かれている。しかし、注「b<sup>a)</sup>」  
の最後の数行は狭いところにひどくつめて書かれていて、少くともその部分  
は注「b)」よりもあとで書き加えられたものであることを示唆している。も  
しかすると「b<sup>a)</sup>」の全体が「b)」よりもあとに書かれたのかもしれない。  
いずれにせよ、ここでは、本文中の注番号「b<sup>a)</sup>」があとから書き込まれた  
ものであることをも考慮して、「b)」, 「b<sup>a)</sup>」の順に注を収めておく。なお、  
この「b)」の末尾の文は、In time of abundance, and cheap と書いたところ  
で空白がなくなり、++ という符号でこのページの最下部に続けられている。  
ところがその左端部が紙の損傷で、あるべき連結符号++ が欠けている。  
そのあととは次のようになっている。money, „this I know reaches an  
enormous amount.“ (43, 44, Leatham l. c.) これは、Leatham の原文の  
とおりである。
- 25) この注は注「b)」のまえに置かれているが、ここにもってきた。前出注24)  
を見よ。
- 26) この注は削除されている。
- 27) この注は前出の注「注 a) に。318ページを見よ。云々」の次に書かれてい  
る。
- 28) この付近の左の欄外に「d)」と書かれているが、その上を縦線が走ってい  
る。これが抹消線であるのか、その他の意味をもった線なのかは判断できな  
い。
- 29) ボウズンキットからのここまでの引用は削除されている。
- 30) この付近の左の欄外に「e)」と書かれているが、前出注 28) に記した縦線  
がこの上をも通っている。これも抹消線であるかどうか判断できない。
- 31) このパーレン ( ) に囲まれた部分は削除されている。

/317上/④ 信用制度の他方の側面は貨幣取扱業の発展に結びついて  
いる。貨幣取扱業の発展は、もちろん、資本主義的生産様式一般<sup>1)</sup>のなか  
で進む商品取扱業の発展と歩調をそろえて進んでいく<sup>2)</sup>。<sup>3)</sup>/

- 1) 「様式一般」——削除。
- 2) 「歩調をそろえて進んでいく」 pari passu gehen → Schritt halten.
- 3) エンゲルス版ではここで改行されていない。

/317上/⑤ すでに前章<sup>1)</sup>で見たように、商人等々<sup>2)</sup>の準備金の保管、貨  
幣の払い出しや受け取り<sup>3)</sup>の技術的諸操作、国際的支払（したがってまた  
地金取引<sup>4)</sup>\*は、貨幣取扱業者の手に集中される。貨幣取扱業というこの土  
台のうえで信用制度の他方の側面が進展し、〔それに〕結びついている、  
——すなわち、貨幣取扱業者の特殊的機能としての、利子生み資本あるい  
は 貨幣資本<sup>マニド・キャピタル<sup>4)</sup></sup>の管理である。<sup>5)</sup> 貨幣の貸借が彼らの特殊的業務になる。彼  
らは 貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup>の現実の貸し手と借り手とのあいだに《媒介者として》はい  
ってくる。一般的に表現すれば、銀行業者の業務は、一方では<sup>6)</sup>、貸付可  
能な貨幣資本<sup>ゲルトカピタル</sup>を自分の<sup>7)</sup> 手中に大規模に<sup>8)</sup> 集中することにより、したがっ  
て個々の貸し手に代わって銀行業者がすべての貨幣の貸し手の代表者とし  
て再生産的資本家<sup>9)</sup>に相対するようになる。彼らは 貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup>の一般的な  
管理者としてそれを自分の手中に集中する<sup>10)</sup>。他方では、彼らは、商業世  
界全体のために借りるということによって、すべての貸し手に対して借り  
手を集中する。（彼ら<sup>11)</sup>の利潤は、一般的に言えば、彼ら<sup>12)</sup>が貸すときの  
利子よりも低い利子で借りるということにある。）<sup>13)</sup> 銀行は、一面では  
貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup>の、貸し手の集中\*\*を表わし、他面では借り手の集中\*\*を表わ  
しているのである。/

- 1) 「前章」（これは、「第4章。商品資本および貨幣資本の商品取扱資本およ  
び貨幣取扱資本への、すなわち商人資本への転化」をさす）→「前篇（第  
19章）」

14 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

- 2) 「商人等々 [Kaufleute etc.]」→「事業家 [Geschäftsleute]」
- 3) 「貨幣の払い出しや受け取り [Geldauszahlen u. Einnehmen]」→「貨幣の受け払い [Geldeinnehmen und Auszahlen]」
- 4) 「貨幣資本」 monied Capital → Geldkapital\*\*\*
- 5) この1文の原文は次のとおりである。Auf dieser Basis d. Geldhandels entwickelt sich, schließt sich an, d. andre Seite d. Creditwesens—d. Verwaltung d. Zinstragenden Capitals od. des monied Capital als besondere Function d. Geldhändler. エンゲルス版では次のようになっている。「この貨幣取扱業と結びついて、信用制度の他方の側面、すなわち利子生み資本あるいは貨幣資本の管理が、貨幣取扱業者の特殊的機能として発展する。[Im Anschluß an diesen Geldhandel entwickelt sich die andre Seite des Creditwesens, die Verwaltung des zinstragenden Kapitals oder des Geldkapitals, als besondere Funktion der Geldhändler.]」
- 6) 「一方では」→「この面から見れば」
- 7) 「自分の」 ihrer → seiner
- 8) 「大規模に [auf großer Stufenleiter]」→「大量に [zu großen Massen]」
- 9) 「再生産的資本家」→「産業資本家や商業資本家」
- 10) この1文の原文は次のとおりである。Sie concentriren das monied Capital in ihren Händen als d. allgemeinen Verwalter desselben. エンゲルス版では次のように変えられている。「彼らは貨幣資本の一般的な管理者になる。[Sie werden die allgemeinen Verwalter des Geldkapitals.]」
- 11)12) 「彼ら」——前者では ihr, 後者では sie であるが、「貸す [ausleihen]」および「借りる [borgen]」がどちらも複数形であって、この ihr も sie も複数であることがわかる。エンゲルス版ではこの2つの動詞が単数に変えられている (ausleiht および borgt)。それは次注13)に記す、文の置き換えと関係があり、この変更によって ihr も sie も「銀行」(単数)をさすものとなっている。
- 13) この1文は、前後のパーレンを除いたうえで、次の文のあとに、つまりこのパラグラフの最後に置かれた。

\* 「商人等々」以下ここまでの原文は次のとおりである。d. Aufbewahrung d. Reservefonds d. Kaufleute etc., d. technischen Operationen d. Geldauszahlens u. Einnehmens, d. internationalen Zahlungen (u. damit d. Bullionhandel) このなかでイタリックにした d. をエンゲルスは der と読んでいる。この場合には訳文は次のようになる。「商人等々の準備金の保管、

貨幣の払い出しや受け取りおよび国際的支払の技術的諸操作（したがってまた地金取引）。しかし、この d. は die と読むほうがいいように思われる。もちろん「技術的諸操作」を「国際的支払」にかかわらせること自体にはなんの問題もないが、ここでは、「（したがってまた地金取引）」の部分は「国際的支払」にのみかかわっているように感じられるからである。

\*\* この2か所の「集中」の原語は Centralisation である。この草稿で Centralisation という語を使っているきわめてめずらしい例である。このパラグラフでも、これ以前のところにみられる「集中する」はすべて concentriren であるように、この草稿では「集中」、「集中する」にあたる語としては、ほとんど Concentration, concentriren を用いている。この2語, Konzentration と Zentralisation を明確に区別して用いるようになるのは、『資本論』第1部フランス語版からであろう。

\*\*\* 草稿の「第5章」では、循環中に資本が取る1姿態としての——生産資本および商品資本と並ぶ——「貨幣資本」は例外なく Geldkapital となっているが、それとは区別される独自の範疇としての「貨幣資本」は、ほとんど、monied capital, moneyed capital, money capital (capital の c は大文字の場合が多い) となっていて、Geldcapital と表記されているのはごく稀である。このことは、エンゲルス版の第21—24章に相当する部分についてもあてはまる。以下、Geldcapital 以外の場合には、ルビをつけることにし、Geldkapital に変えられていることをいちいち注記することはしない。

/317上/⑥ 銀行が自由に処分できる貸付可能な資本は二様の<sup>1)</sup>仕方で銀行に流れ込む。一方では<sup>2)</sup>、生産的資本家<sup>3)</sup>たちの出納係として<sup>4)</sup>、銀行の手中には、それぞれの生産者や商人が準備金として保有する貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup>または彼らのもとに支払金として流れてくる貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup>が集中する<sup>e)5)</sup>。この準備金は、<sup>6)</sup> 彼らの手中で<sup>7)</sup>、貸付可能な貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup><sup>8)</sup>になる<sup>9)</sup>。これによって、商業世界の準備金は、共同の準備金として集中されるので、必要な最小限度に制限されるのであって、もしそうでなかったならば準備金として眠っているはずの貨幣資本<sup>マニド・キャピタル</sup>部分が利子生み資本として機能する、つまり貸し出されるのである<sup>10)</sup>。ところで他方では<sup>11)</sup>、銀行の貸付可能な資本は、<sup>マニド・キャピタリスト</sup>貨幣資本家たちの預金によって<sup>12)</sup>形成される<sup>13)</sup>のであって、彼らはこの預金の貸出を銀行にすかせるのである。<sup>14)</sup> 銀行制度の発展につれて、またこ



16 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

とに銀行がどの預金にも<sup>15)</sup>利子を支払うようになれば、すべての階級の貨幣貯蓄<sup>16)</sup>(すなわち当面遊休している貨幣)<sup>17)</sup>は銀行に預金され<sup>18)</sup>、こうして<sup>19)</sup>、もしそうされなかったならば貨幣資本として働くことができなかつたはずの小さい金額が大きな金額に、こうして1つの貨幣力にまとめられる<sup>20)</sup>。この集積<sup>21)</sup>は、銀行制度の特殊的作用として、本来の貨幣資本家<sup>マニド・キャピタリスト</sup>と借り手とのあいだでの銀行の<sup>22)</sup>媒介者的役割〔Mittlerschaft〕とは区別されなければならない<sup>f)</sup><sup>23)</sup>。最後に、ただ少しずつ<sup>24)</sup>消費しようとする収入も、銀行に預金される。<sup>g)</sup><sup>25)</sup>/

/318下/②<sup>25)</sup> g)<sup>a)</sup> トウック。「銀行業者の業務は二様のものである。

すなわち、第1に、資本を直接に運用できない人々からそれを集めて、それを運用することができる人々に分配し移転することである。

これは資本の流通である。もうひとつの部門は、彼らの顧客の所得から預金を受け入れ、顧客が消費の対象に支出するのにある金額を必要とするときにそれを払い出すことである。これは通貨の流通である。」

(トウック『通貨原理の研究、云々』、第2版、ロンドン、1844年、36ページ)「一方は、一面では資本の集中、他面ではその分配であり、他方は、それぞれの地方の地方的目的のための流通の管理である。」(同前、37<sup>26)</sup>ページ。)<sup>27)</sup>/

- 1) 「二様の〔doppelt〕」→「いろいろな〔mehrfach〕」
- 2) 「一方では」→「まず第1に」
- 3) 「生産的資本家」→「産業資本家」
- 4) 「生産的資本家たちの出納係としての」→「銀行は産業資本家たちの出納係だから」
- 5) この注番号「e」に対応する注は、前注の「d」と同様に、書かれていない。ただ、すでに注記したように前出の注「注aおよびbに」の左方欄外に注番号「e」があるが、前注「d」の注番号に重なっている縦線がこの「e」の上にも重なっている。
- 6) ここに「こうして〔so〕」を挿入。

- 7) 「彼らの手中で」——削除。
- 8) 「貸付可能な貨幣資本」monied Capital, das verleihbar ist→verleihbares Geldkapital
- 9) 「なる [wird]」→「転化する [verwandelt sich]」
- 10) 「利子生み資本として機能する, つまり貸し出されるのである [functioniert als Zinstragendes Capital, wird ausgeliehn]」→「貸し出されて, 利子生み資本として機能するのである [wird ausgeliehen, fungiert als zinstragendes Kapital]」
- 11) 「ところで他方では [andererseits aber]」→「第2に」
- 12) 「によって [durch]」→「から [aus]」
- 13) 「形成される」wird.....gebildet → bildet sich
- 14) ここに「さらに」を挿入。
- 15) 「どの預金にも [für jede Deposit]」→「預金に [für Depositen]」
- 16) 「貨幣貯蓄」Geldersparungen → Geldersparnisse
- 17) 「(すなわち [od.] 当面遊休している貨幣)」→「および [und] 当面遊休している貨幣」
- 18) エンゲルス版ではここで文を切っており, 以下は別の文となっている。
- 19) 「こうして [u. so]」——削除。
- 20) 「もし」以下の部分は原文では次のようになっている。[werden...] kleine Summen, die sonst nicht als monied Capital hätten wirken können, in großen Massen vereinigt u. so zu einer monied force. エンゲルス版では次のように変えられている。「それだけでは貨幣資本として働くことのできない小さい金額が大きな金額にまとめられて, 1つの貨幣力を形成する。[Kleine Summen, jede für sich unfähig, als Geldkapital zu wirken, werden zu großen Massen vereinigt und bilden so eine Geldmacht.]」
- 21) 「集積 [collection]」→「小さな金額の集積 [Ansammlung kleiner Beiträge]」
- 22) 「銀行の [ihr]」→「銀行制度の [sein]」
- 23) この注番号「f)」に対応する注は存在しない。ただ, 次の318ページにある前出の注「注 a へ。トゥック」の冒頭のところに, 「f) ギルバート」と書いたのち消している。\*
- 24) 「少しずつ」à fur et mesure\*\*→ allmählich
- 25) 草稿では, この318ページの下半部の最初には注「注 a) へ」がはいっているが, これは注 a) の次に移した。
- 26) 草稿では, 誤って「39」と書かれている。

18 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

27) エンゲルス版では、この注の内容を本文部分のすぐ次に収め、そのあとに次のように書き加えている。「われわれは第28章でこの個所に立ち返る。」

\* ここに注 f) を書きかけたのであろうと思われる。なぜ消したのかはわからないが、「注 a へ。トック」を書いたのち「f)」にふたたびかかるつもりでいたのにそれを忘れて先に進んだ、という可能性も十分あるであろう。もしギルバートから引用しようとしたのだとすると、次の個所がここにあたるのではないかと思われる。「こうして、きわめて多数の個人の手中で不生産的に眠っていたさまざまな少額の貨幣が、銀行家の手中に集積 [collect] されて、1つの金額となるであろう。銀行業者はこの金額の一部を、預金者たちが彼あてに振り出すであろう小切手に応じるために自分の引出しのなかに残し、その他の部分で手形を割引くか、あるいはそれをそれ以外の方法で彼の業務で運用するであろう。だが、もし預金銀行の代わりに発券銀行だけが設立されているのだとすれば、それぞれの少額の貨幣が、以前のように、さまざまな個人の手中で不生産的に留まっているであろう。また銀行業者は、手形を割引くのに、自分自身の約束手形を発行するであろう。」(J. W. ギルバート『銀行業の歴史と原理』、ロンドン、1834年、118—119ページ。Michie 編の1881年改訂版、128—129ページ、による。)

\*\* マルクスはほとんどつねに、au fur à mesure を à fur et mesure 等々と記している。

/317上/⑦ 貸付は、(ここでは本来の商業信用 [Handelscredit] だけを問題にする)<sup>1)</sup>、手形の割引——手形をその満期前に貨幣に転換すること——によって、また、さまざまな形態での前貸<sup>2)</sup>、すなわち、スコットランドの諸銀行でのような<sup>(a)<sup>3)</sup>b<sup>3)</sup></sup>対人信用での直接前貸、各種の利子生み証券、国債証券、株式を担保とする前貸<sup>4)</sup>、ことにまた積荷証券<sup>5)</sup>、倉荷証券、および商品所有証書であるその他の証券<sup>6)</sup>を担保とする前貸によって、預金を越える当座貸越、等々によって、行なわれる。(h) |

/318下/③ g)<sup>b)</sup> スコットランドの諸銀行の、銀行券 [notes] での前貸。 /

/318下/④ h) (319ページ、「注 h へ」を見よ。)<sup>7)</sup> /

/319上/⑥ 注 hに。318ページ。手形と積荷証券担保の貸付とによ

る、東インド貿易でのいかさま [Schwindel] について。ここでは、売買が行なわれたから手形等々が振り出されたのではなくて、なにか割引に付することができるもの、すなわち貨幣に換えることができるものを入手するために売買が行なわれた。つまり、こういうわけである。——<sup>8)</sup>

「東インド貿易は1つの巨大な信用制度 [system of credit] であった。ロンドンのある商会がマンチェスターで商品を買えば、これらの商品は6か月後払いの手形で支払われた。そして船積みされるとすぐに、さらにまた、荷受人(商品の受取人、委託販売人)が仕入原価の大部分について、6か月後払いの手形で前貸を受けたが、商品が発送されると、さらにまた、今度は彼が船荷証券を引き当てるに、インドの商会あてに手形を振り出すことが稀ではなかった。<sup>9)</sup> こうして、荷主も荷受人もともに、彼らが実際に商品の代価を支払う何か月も前から資金を手に入れていたのである。そしてこれらの手形が満期になると、「長期取引」での回収のためには時間を与える必要があるという口実のもとに書き替えが行なわれるのはごく普通のことであった。そのうえ、このような取引での損失は、取引を縮小することにはならないで、直ちにそれを増大させることになった。人々が困ってくればくるほど、彼らには、前の投機で失なった資本を新たな前貸を受けて埋めあわせるために、買い入れる必要がますます大きくなったのである。そこで購買は、需要供給の問題ではなくなって、窮地におちいて苦しんでいる商社の金融操作のうちの最も重要な部分となった。しかし、これは状況の一面でしかない。本国では商品の輸出に関連して起こったことが、海外では商品の購買と船積みで起こりつつあったのである。手形を割引してもらえだけの信用のあったインドの商社は砂糖やインディゴや絹や綿花の買い手であったが、それは、最近の陸上郵便がロンドンから伝えてくる価格がインドでのいまの価格につけ加わる利潤を約束したからではなくて、ロンドンの商社あて

20 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

の以前の為替手形がまもなく満期になり、その準備がなされなければならなかったからである。船積みされた砂糖を買い、その代価をロンドンの商社あての10か月後払いの手形で支払い、船積書類を陸上郵便でロンドンに発送する、これほど簡単な方法があるだろうか。それから2か月も経たないうちに、外洋上にある、あるいはもしかするとフーグリ川〔ガンジス川の支流で、ベンガル湾の南160マイルに河口がある〕の河口さえまだ通過していないかもしれない商品が、ロンバード街で担保に入れられたのであって、ロンドンの商社は、この商品を引き当てに振り出された手形が満期になる8か月もまえに資金を手に入れたのである。そして、ビル・ブローカーがすぐ入手できる「マネー」を豊富にもっていて、船荷証券や倉荷証券を担保にして前貸しすることができ、また、ミンシング・レインの著名な商社にあてて振り出されたインド商社の手形をいくらでも割引くことができたあいだは、こうしたことのすべてが、中断も困難もなしに進行したのである。(1847年<sup>10)</sup>11月24日の『マンチェスター・ガーディアン』。)/

- 1) このパーレンに括られた文は、原文では、Das Verleihn geschieht(…)…のように、「行なわれる〔geschieht〕」のあとにはいつている。エンゲルス版ではこの文は geschieht の前に移されている。
- 2) 「さまざまな形態での前貸」——原文では、Vorschüsse, die in verschiedenen Formen, となっている部分を Vorschüsse in verschiedenen Formen と読んで訳した。
- 3) 「スコットランドの諸銀行でのような〔wie bei d. schottischen Banken〕(g)<sup>10)</sup>」——削除。
- 4) 「……を担保とする前貸〔Vorschüsse auf…〕」→「……にたいする担保前貸〔Lombardvorschüsse auf…〕」
- 5) 「積荷証券」Ladungsscheine → Ladescheine
- 6) 「商品所有証書であるその他の証券〔andre Papiere, die beglaubigte Besitztitel auf Waaren sind,〕」→「その他の商品所有証書〔andre beglaubigte Besitztitel auf Waren〕」
- 7) 「319 ページ」は草稿のページである。この指示に従って、319 ページ上半

部の雑録部分に書かれている「注 h, 318ページ, へ」をここに移しておく。

- 8) この注は、エンゲルス版では「II.」という表題番号のもとにまとめられているが、ここまでの部分は次のようになっている。「東インド取引では、もはや、商品が買われたから手形が振り出されたのではなくて、割引に付することができる、貨幣に換えることができる手形を振り出せるようにするために商品が買われたのであるが、この取引におけるいかさまについては、1847年11月24日の『マンチェスター・ガーディアン』は次のように述べている。——」
- 9) 引用のここまでのところは、エンゲルスによって次のように要約されている。「ロンドンにいるAがBに依頼して、マンチェスターにいる製造業者Cから、東インドのDにあてて船積みするための商品を買ってもらう。Bは、CからBあてに振り出した6か月後払いの手形でCに支払う。Bは、Aあてのやはり6か月後払いの手形で支払を受ける。商品が船積みされれば、Aは送られてきた船荷証券を担保に、Dあてのやはり6か月後払いの手形を振り出す。」
- 10) 「1847年」——草稿では「1848年」と誤記されている。1894年版でも「1848年」となっていた。

1318上|① ところで、銀行業者が与える信用はさまざまな形態で、たとえば、銀行業者手形<sup>1)</sup>、銀行信用<sup>2)</sup>、小切手<sup>3)</sup>、等々<sup>4)</sup>で、最後に銀行券<sup>5)</sup>、与えられることができる。銀行券は、持参人払いの、また銀行業者が個人手形と置き換える<sup>6)</sup>、その銀行業者あての手形にはかならない。この最後の信用形態はしろうとには、とくに日につく重要なものとして現われる。なぜならば、第1には、信用貨幣のこの形態<sup>7)</sup>は単なる商業流通から出て一般的流通にはいり、ここで貨幣として機能しており<sup>8)</sup>、また、たいていの国では銀行券を発行する主要銀行は、国立銀行と私立銀行との奇妙な混合物として事実上その背後に国家信用をもっていて、その銀行券は多かれ少なかれ法貨<sup>9)</sup>でもあるからである。なぜならば、第2には、銀行券は流通する信用章標にすぎないので<sup>10)</sup>、ここでは、銀行業者が取り扱うものが信用そのものであることが目に見えるようになるからである。しかし、銀行業者はそのほかのあらゆる形態での信用でも取引するのであっ

て、彼が自分に預金された貨幣を現金で前貸しする場合でさえも<sup>11)</sup>そうである、等々<sup>12)</sup>。(1) 実際には、銀行券はただ卸売業の銻貨をなしているだけであって、銀行で主要な問題となるのは<sup>13)</sup>つねに預金である。たとえば、スコットランドの諸銀行を見よ。<sup>14)</sup>(2)/

/318下/⑤ i) [『委員会報告書』、『商業的窮境』, 1847年, 証言記録] 第4636号。「私の聞いたところでは、自分の手形を割引してもらい当事者が、イングランド銀行券の代わりにロンドンあての為替手形を受け取るケースが、数え切れないほどあったそうです。[ ]」 第4637号。[「それはどちらかというとならば1844年の条例を逃れる違法行為だとおっしゃりたいことはありませんか?—それは一種の置き換えなのです。……[ ]」第4645号。「当事者またはその指図人に支払われるべき(ロンドンの銀行業者あての)21日後払いの為替手形。』<sup>15)16)</sup>/

/318下/⑥ j) ロイド銀行のぺてん [Mogelei]を見よ。(1848年, 委員会)《商業的窮境》第901号(同前。)「マネーが逼迫するときはいつでも、銀行業者たちは自分の顧客にロンドンあての手形を受け取らせようと振舞うのが普通でした。[ ]」 第902号。[「それは通貨の代役をしますか?—はい。もし銀行券が欲しければ、その手形を再割引しに行かなければなりません。[ ]」 第903号。[「それは銀行業者にとっては、貨幣を造り出す特権として作用するのですね?—一時的にはそうです。それは、遠い昔から逼迫期にジョウンズ=ロイド商会が採ってきた支払正貨 [species of payment] です。[ ]」 第904号。[「それでは、同商会の為替手形は逼迫期のあいだに増加するのですね?—マネーが5パーセント以上の価値をもつときにはいつでもそうでした。[ ]」 第905号。「……手形は、銀行券を比較的容易に入手するための手段 [medium] でした。[ ]」……[第907号。]銀行業者は、自分が当事者から受け取った手形よりも割引され易い手形を与えるのです。…… [第911号。] ジョウンズ=ロイド商会のこれら

の手形は、割引されるまえにも役に立ちました。ある人が貨幣を入手することができなければ、彼はそのかわりにジョウンズ=ロイド商会の手形を受け取ります。第992<sup>17)</sup>号。[「これらの手形が20人も30人もの手を通ることもきわめてしばしばでした。[ ]」<sup>18)</sup>

/319下/①<sup>19)</sup> j)<sup>20)</sup> フラートン。すべてこれらの形態は「移転できる請求権」である、というよりはむしろ、請求権を移転できるものにする用具である。<sup>21)</sup>「信用が取ることでできる形態で、信用がときには貨幣の諸機能を果たすことを求められないような形態はほとんどない。そしてこの形態が銀行券であろうと、為替手形であろうと、銀行小切手であろうと、過程はすべての本質的な点で同じであり、結果も同じである。」(フラートン『通貨調節論』、第2版、ロンドン、1845年、38ページ。) マカラクによれば、「通貨の節約のために用いられている諸手段がなかったならば、今日50百万ないし60百万の銀行券および金によって果たされている諸機能を果たすのに、どんなに少く見積っても、200百万の通貨が必要とされるであろう。」(同前、46ページ)<sup>++22)</sup> 「銀行券は信用の小銭である。」(同前、51ページ。) 銀行業者たちのあいだでの銀行券交換 [Notenaustausch] (スコットランドの諸銀行は週に2回、エディンバラにいる自分の代理人を通じて、[銀行券交換を行っていた][ ]) については、次のよう[に言われている。]——「世界中のどんな地方でも、発券銀行業者が自分の近隣の同業者たちの銀行券 [promissory notes] を再び払い出す [re-issue] ような慣習はない。そして、1枚の銀行券も再び払い出されるのでないかぎり、銀行券が発行者のもとに還流しようと、あるいは、たまたまそれを所持している人の引出しのなかにしまい込まれようと、どちらにせよ当事者以外の誰にとってもほとんど大した問題ではありえない。」(同前、95ページ注。)<sup>23)</sup>/

/319下/④ ++注 j へ。<sup>24)</sup> 「フランス銀行が定期的に公表している統計は、小切手の使用によって同行の内部で貨幣が節約された大きさを示



24 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

している。……1840年12月31日にいたる4半期に、正貨、銀行券、口座から口座への振替〔transfer〕(小切手によって当座勘定のうえで行なわれる振替)、のそれぞれによってなされた取引は、次のようになっていた。——正貨によって、221,432,200フラン、銀行券によって、1,049,240,000フラン、振替によって、1,742,897,000フラン。したがって、パーセントでのその比率は、振替が58%、銀行券が35%、正貨が7%、であった。(『通貨理論<sup>25)</sup>論評、云々』、40〔-41〕ページ。)<sup>26)</sup> /319下/② 1)\* ロイド。「銀行業者は、一方で預金を受け入れ、〔他方では〕これらの預金を資本の形態で彼ら〔資本を欲する活動的で精力的な人々〕の手に任せることによって〔それらを〕充用する仲介者です。(第3763号。ロイド《(オーヴァストウン)》の答弁。《議会》〔銀行法特別委員会〕報告書、1857年。)<sup>27)</sup>「銀行家が公衆に行なう提案は次のようなものである。——「私は私の信用をあなたの資本と交換しましょう。ただしあなたは、あなたの資本を利子なしで利用することを私に許さなければなりません、それでもあなたは、私の信用の使用にたいする利子を私に支払わなければなりません。〔 〕」(ラゲール(コンディ)『通貨および銀行業に関する一論』、第2版、フィラデルフィア、1840年。204ページ、注。)<sup>28)</sup> /

/318上/③ [注1] (318および319ページ)へ<sup>29)</sup>。——「銀行の事業資本〔trading capital〕は2つの部分から、すなわち投下資本と借り入れられたその銀行業資本〔banking capital〕とから成っている。」(J. W. ギルバート『銀行業の歴史と理論』、ロンドン、1834年)(117ページ)。「銀行業資本あるいは借入資本を調達するための3つの方法は、第1に預金の受け入れによって、第2に銀行券の発行によって、第3に手形の振出しによって、である。もしある人が私に100ポンドを無償で貸してくれて、私がこの100ポンドを別のある人に4%の利子で貸すならば、私は1年のうちにこの取引によって4%をもうけるであろう。さらに、ある人が私の「支払約束〔Promise to pay〕」を受け取

ったのち、年末にそれを私に返してくれて、しかもまるで私が彼に100個のソヴリン金貨を貸したかのようにそれにたいする4%を私に支払ってくれるならば、この取引によって私は4%もうけることになる。さらにまた、地方の町にいるある人が私に100ポンドを、21日後には私が同じ額をロンドンにいるある人に支払う、という条件でもたらずならば、この21日のあいだに私がこの貨幣でもうけることができる利子は、すべて私の利潤であろう。以上は、銀行業の諸操作を、また預金、銀行券、手形によって銀行業資本が創造される方法を、偏見なく描いたものである。」(同前。)[「銀行業者の利潤は、一般に、彼の借入資本あるいは銀行業資本の額に比例する。銀行のほんとうの利潤を確定するためには、投下資本にたいする利子を総利潤から引き去らなければならない。残額が銀行業利潤である。」(同前、118ページ。[ )]] 「銀行業者からその顧客への前貸は、他の人々の貨幣で行なわれる。」(同前、146ページ。)[「銀行券を発行しない銀行業者でさえも<sup>30)</sup>、手形の割引によって銀行業資本を創造する。彼らは彼らの割引を、彼らの預金を増加させるのに役立つものにするのである。ロンドンの銀行業者たちは、自分のところに預金口座を持つ人々のため以外には割引をしようとししない。」(119ページ。)[「手形を割引いてもらってその全額にたいして利子を支払った当事者は、この額のうちの多少の部分、利子なしに銀行業者の手に残しておかなければならない。この方法で銀行業者は、実際に前貸しされた貨幣にたいしてその時の普通の利子率以上のものを受け取るのであり、また彼の手に残された残高だけの銀行業資本を調達するのである。」(同前、120ページ。[ )]/

/319上/③ 注1, 318ページへ。<sup>31)</sup> 「発券銀行はつねに自己の銀行券を発行するので、その割引業務はもっぱらこの最後の種類の資本〔銀行券そのものによって調達された資本〕で営まれるように見えるかもしれないが、そうではないのである。銀行業者が自分の割引する手形の

26 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

すべてに対して自分自身の銀行券を発行するということは大いにありうるが、そうであるにもかかわらず、彼の手にある手形の10分の9が現実の資本を表わしているかもしれない。というのは、まずはじめには手形に対して銀行券が与えられるのではあるが、しかしこれらの銀行券は、手形が満期になるまで流通の中にとどまっている必要はないからである。手形は満期まで3か月間あるのに、銀行券は3日のうちに帰ってくるかもしれないのである。」(同前〔ギルバート『銀行業の歴史と理論』, 172ページ。)/

/319下/③ 2) 預金。<sup>32)</sup> 「あなたが今日Aに預金する1,000ポンドが明日は再び払い出〔re-issue〕されてBへの預金になるというのは、争う余地なくほんとうである。それは明後日にはBから再び払い出されてCへの預金になる、等々、限りなく続くかもしれない。こうして、同じ1,000ポンドの貨幣が、相次ぐ移転によって、まったく確定のできない何倍もの預金額になるかもしれない。それゆえ、連合王国にあるすべての預金の10分の9が、各自自分の預金に対して責任を負っている銀行業者たちの帳簿に記載された預金の記録以外には存在しないということもありうるのである。……スコットランドではそうなのであって、ここでは通貨は3百万ポンドを越えたことがないのに、預金は27百万ポンドだった。預金の払戻しを求める一般的な銀行取付けが生じるのでなければ、同じ1,000ポンドが、逆の道を送り返されて行けば、同様に確定できない金額を同じ容易さで決済することができる。今日あなたがある事業家にたいするあなたの債務を決済するのに用いたその同じ1,000ポンドが、明日は、商人にたいするこの事業家の債務を決済し、その翌日には、銀行にたいするこの商人の債務を決済する、等々、限りなく続くかもしれない。こうして、同じ1,000ポンドが人手から人手に、銀行から銀行へと渡って行って、考えられるかぎりのどんな預金でも決済できるのである。」(『通貨理論<sup>33)</sup>論評, 云々』, 62, 63ページ。)<sup>34)</sup>

銀行がその「預金者」の引き出しにたいして「銀行券」を発行する場合には、それは明らかに、ただ銀行の負債の形態が要求次第支払われるべき預金の形態から要求次第支払われるべき銀行券の形態に変わるだけのことである。<sup>35)</sup>

- 1) 「銀行業者手形 [bankers bills]」 → 「他の銀行あての手形 [Wechsel auf andre Banken]」
- 2) 「銀行信用 [Bank credits]」 → 削除。
- 3) 「小切手 [cheques]」 → 「他の銀行あての小切手 [Schecks auf solche]」
- 4) 「等々 [etc.]」 → 「同種の信用開設 [Krediteröffnungen derselben Art]」
- 5) 「銀行券で [in Banknoten]」 → 「銀行券を発行する銀行の場合には、その銀行自身の銀行券で [bei Banken mit Notenausgabe, in den eignen Banknoten der Bank]」
- 6) 「持参人払いの、また銀行業者が個人手形と置き換える [der au porteur zahlbar ist u. den er d. Privatwechsln substituirt]」 → 「即時持参人払いの、また銀行業者によって個人手形と置き換えられる [zahlbar jederzeit an den Inhaber, und vom Bankier den Privatwechsln substituirt]」
- 7) 「信用貨幣のこの形態 [diese Form d. Creditsgeldes]」 → 「この種の信用貨幣 [diese Art Kreditgeld]」
- 8) 「機能しており」 functionirt → fungiert
- 9) 「法貨」 legal tender → gesetzliches Zahlungsmittel
- 10) 「銀行券は流通する信用章標にすぎないので [indem d. Banknote nur circulirende Creditzeichen]」 → 「銀行券は流通する信用章標を表わすにすぎないので [indem die Banknote nur ein zirkulierendes Kreditzeichen vorstellt]」
- 11) 「場合でさえも」 auch wenn → selbst wenn
- 12) 「等々」 → 削除。
- 13) 「銀行で主要な問題となるのは [was d. Hauptsache bei d. Banken bildet]」 → 「銀行で主要な問題として重きをなすのは [was als Hauptsache bei den Banken ins Gewicht fällt]」
- 14) 「たとえば、スコットランドの諸銀行を見よ。[Sieh z. B. d. schottischen banks.]」 → 「その最良の証明を与えるのはスコットランドの諸銀行である。[Den besten Beweis liefern die schottischen Banken.]」
- 15) この引用の左側には、インクで縦線が引かれている。

28 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

- 16) この引用はエンゲルス版では次のように要約されている。「40年代には、ロンドンでの手形割引で、無数の場合に銀行券ではなくて1銀行から他の銀行にあてた21日払いの手形が用いられた。(地方銀行業者 J. ピーズの陳述、第4636号および第4645号。)」
- 17) 「992」——「995」と誤記されている。
- 18) この引用はエンゲルス版では、前注 16) に掲げた要約にすぐ続けて、その要旨がまとめられており、その末尾に証言番号が書かれている。MEW 版では「第905—902, 第992号」となっているが、このうちの「第905—902号」は明らかに誤植である。1894年版では「第901—904号, 第995号」となっている。しかし、エンゲルスの要約の内容からしても、ここは「第901—905号, 第907号, 第911号, 第992号」とあるべきところであろう。
- 19) 319ページの下半部はここから始まる。
- 20) この注番号は、前ページの注 j) に続く、という意味のものと考えることができるであろう。
- 21) この1文の原文は次のとおりである。Alle diese Formen sind „transferable claims“, vielmehr instruments, wodurch d. claims transferable. エンゲルス版では次のようになっている。「すべてこれらの形態は、支払請求権を移転できるものにするに役だつ。[Alle diese Formen dienen dazu, den Zahlungsanspruch übertragbar zu machen.]」エンゲルス版ではこの文章のあとに、フラートンの著書の38ページからの引用と51ページからの引用とを収めている。
- 22) 「マカラクによれば」以下ここまでのところは削除されている。
- 23) 「銀行業者たちのあいだでの」以下ここまでのところは削除されている。
- 24) この「注 j へ」は、319ページ下半部の最下部に書かれている。これは2つ目の注 j) のなかの「+」がつけられた個所(注番号22)を付したところに属するものである。
- 25) 「理論」——草稿では「問題 [Question]」と誤記されている。
- 26) この「注 j へ」は削除されている。
- 27) 第3763号からのこの引用は、エンゲルス版第26章のなかにも見出される(MEW, Bd. 25, S. 448, Z. 1—3)。しかし、これは草稿のその部分(S. 325)に記されたものによっているものであり、ここから取られたものではない。
- 28) この注はその全体が削除されている。
- 29) 以下の注「注1」(318および319ページ)へは、318ページ上半部から始まる雑録部分の冒頭に書かれている。この注が318ページにあるにもかかわらず「318および319ページ」と次のページをも指示しているのは、前節

でも触れたように、雑録部分がページ下半部の注部分よりもあとに書かれたためと考えられる。またここで両ページを指示しているのは、318ページの本文のなかに注番号があり、319ページには注そのものがある、ということを示すためではないかと思われる。

エンゲルス版では、前出の注「j) フラートン。」からの引用に続いて、「以下は、J. W. ギルバート『銀行業の理論と歴史』、ロンドン、1834年、からの引用である。——」として、以下、マルクスが注と雑録とのなかでギルバートの書から引用している諸箇所をギルバートの書でのページ順に収めているが、その最初のものがこの「注1」(318および319ページ)へである。

- 30) 「銀行券を発行しない銀行業者でさえも」——原文は、Grade d. bankers, die keine Noten ausgeben, となっているが、ギルバートの原文は Even those bankers who do not issue notes, であって、おそらく英語の even をドイツ語の eben の意味に読み grade としたのであろう。grade のままなら、「銀行券を発行しない銀行業者こそは」となるが、ここでは even のほうがマルクスの引用の意図によりかなうものと思われるので、それによっておく。なお、エンゲルス版では gerade のままになっている。

- 31) この注は319ページ上半部の雑録のなかにあるが、ここに移した。ここでは「318ページ」とだけ書かれている。これは318ページの注番号「(1)」を意味するものと考えられるが、もしかするとこの注のまえに収めた「注1」(318および319ページ)へを意味するのかもしれない。

この注の左側には鉛筆で縦線が引かれており、そのさらに左側には同じく鉛筆で「5x」と書かれている。後者の筆跡はエンゲルスのものと思われる。縦線もおそらくエンゲルスによるものであろう。

エンゲルス版では、以下の引用は、ギルバートからの一連の引用のなかに組み込まれている。その位置は、ギルバートの書でのページの順に従って、137、138ページからの引用と174、175ページからの引用とのあいだに置かれている。

- 32) 「預金。」——削除。以下の引用は、エンゲルス版では、ギルバートからの一連の引用のあとに、ただ「『通貨理論論評』、62—63ページ。——」という導入部だけをつけて収められている。
- 33) 「理論」——草稿では「問題 [Question]」と誤記されている。
- 34) 『通貨理論論評』からのこの引用は、草稿339ページにもあり、それはエンゲルス版の第29章 (MEW, Bd. 25, S. 490) に収められている。\*\*
- 35) このパラグラフは削除されている。

30 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

\* この原注と次の原注とがなぜ k) および l) とされないで 1) および 2) とされたのか、その理由はさだかではない。

\*\* 現行版では、この同じ引用のドイツ語訳が、ここと第29章とでは少し違っている。しかし草稿では、英文のなかにはいつているドイツ語の部分があったく同じであり、句読点などのごくわずかの違いをのぞいて同一のものと判断できる。ドイツ語訳の違いは、エンゲルスが兩個所をそれぞれ独立に訳したために生じたものであると思われる。

/318上/② 特殊な信用諸用具<sup>1)</sup>ならびに銀行<sup>2)</sup>の特殊な諸形態は、われわれの目的のためにはこれ以上考察する必要はない。

1) 「信用諸用具\* [Creditinstrumente]」→「信用諸機関 [Kreditinstitute]」

2) ここに「そのもの [selbst]」を挿入。

\* 冒頭のパラグラフ(/317上/②)の注1)のなかの「諸用具」に付した注\*を参照されたい。

## B. 雑 録

/318上/④ 準備金の節約。預金, 小切手。<sup>1)</sup>「預金銀行は振替によって流通媒介物の使用を節約し、少額の貨幣で多額の取引を処理することを可能にする。このようにして遊離された貨幣は、銀行業者が、割引その他によって彼の顧客に前貸をすることに充用する。それゆえ、振替の原理は預金制度に追加的な効果を与えるのである。」(123, 124 ページ)「互いに取引を行なう両当事者が彼らの口座を同じ銀行にもっていようと別々の銀行にもっていようと、どちらでもかまわない。というのは、銀行業者たちは手形交換所で彼らの小切手を交換しあうからである。預金制度は、このように振替によって、金属貨幣の使用にすっかり取って代わるほどにまで仕

上げられるかもしれない。かりにだれもが銀行に預金口座をもってその支払のすべてを小切手でするとすれば、これらの小切手は唯一の流通媒介物となるであろう。〔しかしながら〕この場合には、銀行業者たちが自分の手に貨幣を持っているということが前提されなければならないであろう。そうでなければ小切手は価値をもたないであろう。<sup>2)</sup>〕〔ギルバート『銀行業の歴史と理論』、〕124ページ。〕/

- 1) 「準備金の節約。預金，小切手。〔*Oekonomisierung d. Reserverfonds. Deposits, Cheques.*〕 → 「準備金の節約，預金，小切手。〔*Ökonomisierung der Reserverfonds, Depositen, Schecks* :〕」この変更は，ブントをコンマに変えただけであって，意味は基本的に同じである。しかしこれによって，従来訳（長谷部訳，岡崎訳，向坂訳）での，「準備金や預金や小切手の節約」という読みかたが誤っていることは明らかであろう。（もともと「預金や小切手の節約」などということは，ギルバートも論じていないだけでなく，そもそも問題になりようもなかったはずのことだったのであるが。）

エンゲルス版ではこの引用は，上の見出しをつけて，ギルバートからの引用の第2のものとして——すでに見た「注1」（318および319ページ）へ」からの引用に続いて——収められている。

- 2) この最後の部分のギルバートの原文を，Michie 改訂の1881年版（p. 134）によってあげておこう。In this case, however, it must be supposed that the banker has the money in his hands, or the cheques would have no value.

/318上/⑤ 銀行の組織について。1) 支店。2) 代理店。——地方銀行業者は次のようにしている。<sup>1)</sup>〔「」どの地方銀行業者もロンドンに代理人をさしむけて，ロンドンで自分の銀行券や手形の支払をさせ，また他方では，ロンドンに住んでいる当事者が地方に住んでいる当事者の使用のために預託する額を受け取る。〕（ギルバート，同前，127ページ。）〔「」どの銀行業者も他の銀行業者の銀行券は自分の手もとに押えておく〔*intercept*〕のであって，それを再び払い出す〔*reissue*〕ことはしない。彼らは同じ場所に〔毎週〕1度か2度集まって銀行券を交換するのである。残高は，請



求次第支払われるべきロンドンあての手形で支払われる、あるいは、一方の当事者のロンドンにいる代理人が、他方の当事者のロンドンにいる代理人にその額を支払うように指図される。」(同前、134ページ。)|

- 1) 「1)支店。2)代理店。——地方銀行業者は次のようにしている。[1) branches. 2) agencies: So d. country bankers.]」→「銀行の手に地方的交易が集中されるのは次のことによってである。1. 支店銀行によって。地方銀行はその地方の小都市に支店をもっており、ロンドンの銀行はロンドンのあちこちの地区に支店をもっている。2. 代理店によって。」

以下の引用は、ギルバートからの引用の第3のものとして——すぐまえの引用に続いて——収められている。

/318上/⑥ 銀行業と投機<sup>1)</sup>。「[ ]銀行[業]の目的は事業に便宜を与えることであり、事業に便宜を与えるものはなんでも、投機に便宜を与えるのである。事業と投機とは、若干の場合にはきわめて密接に結びついているので、どこまでが事業でどこからが投機なのかを言うことは不可能である。……銀行があるところではどこでも、資本がより容易により安い率で手にはいる。資本が安いということは投機に便宜を与えるのであって、それは、牛肉やビールの安いことが大食や酒びたりに便宜を与えるようなものである。」(〔ギルバート『銀行業の歴史と理論』〕137, 138ページ。)|

- 1) この見出しは削除され、すぐまえの引用に、改行しないで続けられている。

1319上|① 手形の割引によるさまざまな事業部門への諸資本の配分<sup>1)</sup>

「どの事業部門も需要供給に左右される。それゆえ、資本は、需要がより少ないような物品の生産からより大きな需要があるような物品の生産への絶え間ない移動を経ている。だが、この移動はどのようにしてなし遂げられるのだろうか？ 製造業者はある仕事をやめてほかの仕事に就くのだから

うか？ そうではない。事業が下り坂にある製造業者は自分の資本を縮小させるのにたいして、事業が繁栄している製造業者は自分の資本を増大させるであろう。そしてある事業から他の事業への資本の移動は、主として為替手形によって行なわれるのである。販売した商品量が減少した製造業者は、取引銀行業者に割引いてもらう手形を減らし、販売した商品量が増大した他の製造業者は割引のための手形をより多くもっている。銀行業者が主として手形の割引に運用する彼の資本は、こうして容易に或る製造部門から他の製造部門に、それぞれの当事者の事業に正確に比例して移動させられるのである。」(ギルバート, 同前, 153, 154ページ)<sup>2)</sup>/

- 1) この表題 (Vertheilung d. Capitalien in d. verschiedenen Geschäftszweigen durch d. discount of bills.) の最初の単語の Vertheilung は, Ausgleichung という語を消してそのうえに書かれたものである。これはおそらく, はじめ Ausgleichung der Profitrate... (利潤率の均等化云々) と書こうとしたものだと思われる。

この表題の左側にインクで縦線が引かれている。そのはじめのところはゆるやかに右側に曲がり, 右方に少し延びている。

- 2) この部分は, 表題も引用も削除されている。\*

\* 雑録のなかではあるが, このような表題と引用とがすでにこの個所にあることは, 第27章相当部分のはじめの「均等化の媒介」に関する叙述に関連して注目される。エンゲルスが削った理由はわからない。

/319上/② 「長期手形は投機を助長する。」(〔ギルバート,〕 同前, 156ページ)<sup>1)</sup>/

- 1) この引用は削除されている。

/319上/④ 当座貸越 [cash credit], 過振り。<sup>1)</sup> 「当座貸越勘定の過振り(残高を越える小切手の振出し)は取引上の普通のことである。それは,

34 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

じっさい、当座貸越が与えられた目的なのである。〔 〕 (〔ギルバート、〕同前、174ページ。)「当座貸越は人的保証にたいして与えられる {この場合には個人が保証人となり、債務を負う} だけでなく、公債の保証にたいしても与えられる。」(同前、175ページ。)<sup>21)</sup>/

- 1) この見出しは削除されている。
- 2) エンゲルス版では、さきに見た「銀行業と投機」という見出しのついた引用文のあとに、草稿で「注1 (318ページ)へ」とされている部分にあるギルバートからの引用を改行せずに続けて置き、そのあとにこの部分の引用を、やはり改行せずに続けて置いている。

/319上/⑤ 商品担保の前貸。<sup>1)</sup>「商品担保の貸付の方法で前貸される資本は、手形割引のかたちで前貸されるのと同じ結果を生む。だれかが自分の商品を担保にして100ポンドを借りるなら、それは、彼がその商品を100ポンドの手形と引き換えに売って、この手形を銀行業者に割引してもらったのと同じことである。この前貸を入手することによって、彼は市況が好転するまで自分の商品を売らずにおくことができ、こうして、そうでなければさしせまった目的で貨幣を調達するために払わなければならなかった犠牲を避けるのである。」(〔ギルバート、〕同前、180、181ページ。)<sup>22)</sup>/

- 1) この見出しは削除されている。
- 2) エンゲルス版では、この引用は、すぐまえの「当座貸越、過振り」という見出しのある引用文のあとに、改行せずに続けて置かれている。ギルバートからの一連の引用はここで終わる。

/319上/⑦ 現金でなく手形での支払。<sup>1)</sup>〔第7号。〕「4月(1847年)の最後の週に、イングランド銀行はロイヤル・バンク・オブ・リヴァプールに、「当行は貴行にたいする割引を従来の2分の1に減らさなければならぬ〔 〕」と通告しました。〔 〕第16号。〔 〕この通告は非常に悪い影響を及ぼしました。なぜなら、リヴァプールでの支払は近ごろは手形で行な

われるほうが現金で行なわれるよりもずっと多かったからです。また、ふだんは|320|自分の引受手形の支払をするのにその大部分について現金をもってきた商人たちが、近ごろは、自分の綿花やその他の生産物と引き換えに受け取った手形しか持ってくることができなくなっていましたし、しかも窮境が増すのについてこうした状態がきわめて急速に大きくなってきていました。……〔「第17号。」「〕銀行が商人のために支払わなければならなかった引受手形は、たいていは外国から彼らあてに振り出されたもので、従来は彼らの生産物の支払代金で決済される習慣だったものです。〔「第18号。」「〕商人たちが持ってくるのはそれまでとは違って現金ではなくて手形になっていましたが、それらは期間も種類もさまざまで、かなりの数が3か月後払いの銀行手形、しかもその大半が綿花手形でした。」(『商業的窮境』, 1847—48年, (『委員会報告』, 第2巻, 第1部) 26ページ。(〔大英〕博物館でつけられたページ番号によって引用。)<sup>2)</sup>〔〕「これらの手形は、銀行業者の手形であればロンドンの銀行業者によって引き受けられ、そうでないものは、ブラジルやアメリカやカナダや西インド等々、あらゆる取引にかかわっている商人たちによって引き受けられました。……〔「第21号。」「〕商人たちが互いのあいだで手形を振り出したのではなくて、商人から生産物を買った国内の当事者たちが商人に、ロンドンの銀行業者あての手形、またはロンドンにいるさまざまな関係者あての手形、またはほかのだれかあての手形を送ったのです。」(27ページ。)[第19号および第25号の要旨。]「イングランド銀行の通告は、わが国に輸入された生産物の販売にたいして受け取られた手形について、それまではときには3か月を越えることもあった有効期間が短縮される、という結果をもたらしました。」/

- 1) この見出しは削除されている。エンゲルス版では、ここから320ページの末尾——すなわち、第26章に取り入れられた「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響」という見出しのある部分の直前——までは、「Ⅲ.」という

表題番号のもとに一括されている。その冒頭には次のように書かれている。「以下は、すでに引用した報告書『商業的窮境』1847—48年から取ったものである。」

- 2) 「〔〔大英〕博物館でつけられたページ番号によって引用。〕〔(Citirt nach d. im Museum numerirten Seitenzahlen)〕——削除。旧インスティトゥート版の第3部の「編集まえがき」(青木書店版の長谷部訳にははいつているが、MEW版を底本とするその後の諸訳にははいつていない)には、「議会報告書『商業的窮境』1847—48年、からの引用文では、マルクスはしばしば、『報告』そのものの印刷されたページ数のかわりに、大英博物館にあるその綴込本のインクで記入されたページ数を付している」と書かれていた(Volksausgabe, besorgt vom MEL-Institut, Moskau. Band III, Teil 1, 1933, S. 12\*)。ここではマルクス自身がそのことを記しているわけである。なお、三宅義夫『貨幣信用論研究』、未来社、改訂版1970年、の「改訂版へのはしがき」および「第6章 マルクス信用論の一解明」の「一」に、マルクスの使用した4つの報告書についての解説がある。

/320/① 1848年の春(4月)には<sup>1)</sup>、「ほとんどすべての商社が、鉄道への投資のために多かれ少なかれ自分の事業を飢えさせ始めていました。……自分の商業資本の一部分を鉄道のために取り去ることによる〔事業の飢えがあったのです。〕」(〔報告書『商業的窮境』, 1847年,〕41ページ。〔証言第177号。〕)「私人や銀行業者や火災保険会社によって、たとえば8パーセントというような高い利子率での、鉄道株担保の前貸も行なわれました。」(66ページ。〔第521—522号からの要約。〕)「商社が鉄道にたいして行なった貸付がそれほど大規模になったので、これらの商社はその商業操作を続けて行くために、手形の割引によって株式銀行や私営銀行に過度に依存することになりました。」(67ページ。〔第562号の質問から。〕)<sup>2)</sup>

第207号。「あなたは、鉄道株の払込みが、4月と10月に見られた逼迫を引き起こすのに大きな影響を及ぼしたと言われるのですか。——それは4月の逼迫を引き起こすにはほとんどなんの影響も及ぼさなかったでしょう。4月までは、またおそらく夏までも、それは銀行業者の力を弱くするよりも、むしろある点ではそれを強くしたと思います。というのは、支

出のほうはけってして払込みと同じほど急速には行なわれなかったからです。その結果、年初にはたいいの銀行がいくらか大きい額の鉄道資金を手持ちしていました。この資金は夏のうちにだんだん少なくなってって、12月31日には非常に少なくなっていました。10月の逼迫の一因は、銀行業者の手にある鉄道資金の一般的な減少でした。4月22日から12月31日までのあいだに、私たちの手にあった鉄道資金残高は3分の1減少しましたが、これは大ブリテン全土<sup>3)</sup>にわたる鉄道株払込みの影響でした。それはだんだんに銀行業者の預金と銀行の貸方残高とを枯渇させていったのです。」(43, 44ページ。)

サミュエル・ガーニも次のように言っている。第1754—1755号<sup>4)</sup>。<sup>5)</sup>「1846年には鉄道のための資本の需要は〔それ以前よりも〕大きかったのですが、しかしそれは利子を高くはしませんでした。小さな金額が大量の金額にまとめられ、この大量の金額が私たちの市場で使用されました。したがって、だいたいにおいてその影響は、シティの貨幣市場から取り出すよりも多くの貨幣をそこに投げられるということでした。」

上に引用した、リヴァプール株式銀行重役のA. ホジスンは、イングラント銀行は「要するに、為替手形の通常の交換可能性の行く手に障害物を設けたのです」,と言っている。(43ページ。〔第205号。〕)<sup>6)</sup>

彼は、現在の非常に低い利子率を、「商業がほとんどまったくだめになり、貨幣を運用する方法がほとんどまったくなかった」ことから説明している。(45ページ。〔第231号。〕)<sup>7)</sup>

1) この「1847年の春(4月)には〔Im Frühling (April) 1847〕」という一句が、見出しの意味をもっているのかどうか、さだかではない。しかし、このまえの部分は、「現金でなく手形での支払〔Zahlung in Wechsel statt cash〕」という見出しとその内容とが一致しているが、ここ以下の部分はそれとは少し異なった視点から引用されているように思われる。後半に若干見られる下線部分もそのことを示している。そこでこの部分は、このまえの部分とはいちおう独立した引用部分として取り扱っておく。

38 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

エンゲルス版では、ここに次のようなエンゲルスの文がはいっている。

「イギリスの1844—47年の繁栄期は、前に述べたように、最初の大きな鉄道眩惑と結びついていた。これが事業一般に及ぼした影響については、上記報告書に次のような記述がある。」

- 2) エンゲルス版ではここで改行されていない。
- 3) 「大ブリテン全土にわたる [in ganz Großbritannien]」——証言では「全王国にわたる [throughout the Kingdom]」となっている。
- 4) 「第1754—1755号」——草稿では「第1742号」と誤記されている。
- 5) 「サミュエル・ガーニも次のように言っている。第1754—1755号。」→「サミュエル・ガーニ (悪名高い商社オヴァレンド・ガーニ・エンド・カンパニの社長) も次のように言っている。」
- 6) このパラグラフは削除されている。
- 7) このパラグラフは削除されている。同じ記述がエンゲルス版第30章のなか (MEW, Bd. 25, S. 502) にあるが、これは草稿の340ページに続くページ番号のないページから取られたものである。なお、この引用の左側にはインクで縦線が引かれている。

/320/② 手形が銀行業者の準備金 [となる]。同人 [A. ホジソン]<sup>1)</sup>。  
「私たちの預金全体の少なくとも10分の9と、私たちが他の人々から受け取った貨幣の全部とを、毎日次々に満期になる手形のかたちで私たちの手形ケースに入れておくというのが、私たちの習慣でした。……それが非常に大きかったので、取付けのあいだは、毎日満期になる手形が、毎日私たちにたいしてなされる支払請求の金額とほとんど等しかったほどでした。」  
(53ページ。[第352号。]) /

- 1) この見出しは、エンゲルス版では次のような文章になっている。「リヴァプール株式銀行の重役 A. ホジソンは、どんなに大きく手形が銀行業者の準備金を形成することができるかを示している。」

/320/③ 投機手形。綿花手形。<sup>1)</sup> 第5092号。「それらの手形 [ ]」(それで綿花が買われた) [「 ]はおもにだれによって引き受けられたのですか? ——生産物の仲買人によってです。ある人が綿花を買い、そしてそれを仲

買人に引き渡すと、この仲買人あてに手形を振り出して、それを割引してもらうのです。〔〕 第5094号。「そして、そうした手形がリヴァプールの銀行に持っていかれて割引されるのですね?—そうです。それにまたそのほかの地域でもそうされます。……この融資はおもにリヴァプールの銀行によってなされましたが、もしそれがそのようにしてなされなかったならば、今年の綿花は1重量ポンドあたり1 $\frac{1}{2}$ ペンスか2ペンスは安かったと思います。〕<sup>2)</sup>

第600号。「あなたは、投機師たちからリヴァプールの綿花仲買人あてに振り出された大量の手形が流通した、と言われましたが、その方式は、綿花だけでなく、植民地生産物や外国生産物引き当ての手形にたいするあなたがたの前貸にも広げられましたか?—それはあらゆる種類の植民地生産物について言えることですが、しかし綿花については格別にそうです。〔〕 答えはA.ホジソン。〕<sup>3)</sup>

第601号。〔「あなたは銀行業者として……この種の手形はよくないとお考えですか?—そうは考えません。その保有量が適度でさえあれば、私たちはそれをまったく正当な種類の手形とみなします。……この種の手形はしばしば書き替えられます。〕/

- 1) 「投機手形。綿花手形。」→「投機手形。」
- 2) エンゲルス版ではここで改行されていない。
- 3) エンゲルス版ではここで改行されていない。

/320/④ 東インド市場(および中国市場)での大過剰取引 [Hauptovertrading] (1847年)。<sup>122)</sup>

チャールズ・ターナ (リヴァプールで東インド貿易にたずさわる商人<sup>3)</sup>)。「モーリシャス貿易やそれと同種の貿易に関して起こった出来事を、私たちはみな知っています。仲買人たちは、商品の到着後に、この商品を引き当てに振り出されていた手形の支払のために、この商品を引き当



40 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

てに前貸をする、というまったく正当なことや船荷証券担保の前貸の習慣をもっていただけではなくて、……彼らは生産物が船積みされる前に、また場合によってはそれが製造される前にさえ、それを引き当てにして前貸をしました。たとえば、私はある特殊な場合にカルカタで6,000—7,000ポンドの手形を買ったことがあります。この手形の代金は、甘蔗の栽培に役立てるためにモーリシャス島に送られました。手形はイギリスにきましたが、その半分以上が不渡りとなりました。というのは、砂糖の積荷が目の前に現われたとき、それはこれらの手形を支払うものとみなされるどころか、それが船積みされる前から、実際にはおそらく煮つめられる前から、それ以前の債務を支払うために第三者への担保とされていたのだからです。」(同前〔報告書『商業的窮境』, 1847年〕, 78ページ。〔第677号。〕)<sup>4)</sup>

〔第687号。〕「現在は、東インド市場向けの商品の代金は製造業者に現金で支払われなければなりません、それはたいしたことではありません。というのは、買い手がロンドンでいくらかなりと信用をもっていれば、彼は商社あてに手形を振り出して、それを割引させるからです。彼は、今は割引率の低いロンドンに行き、その手形を割引させて、製造業者に現金で支払うわけです。……〔〕 第688号。〔〕 出荷人がインドからの回収金入手できるまでには、少なくとも12か月はかかります……〔? —〕 10,000ポンドか15,000ポンドしか持っていないある人がインド貿易に参加するとしましょう。彼はロンドンのある商社のもとに、この商社に1%を支払うという条件で、かなりの金額の信用を開設するでしょう。そして彼は、送られた商品の代金はこのロンドンの商社あてに送り返されるという了解のもとに、このロンドンの商社あてに手形を振り出すでしょう。しかし、そのさい両当事者はロンドンの彼が現金前貸をする必要がないこと、すなわち、代金が帰ってくるまでは手形が書き替えられることを、完全に了解しているのです。〔〕 第689号。〔〕 これらの手形はリヴァプールやマンチェスターやロンドンで割引されましたが、そのうちの多くがスコットラン

ドの諸銀行の手にあります、云々。[ ] (78ページ。) 第786号<sup>5)</sup>。「先日ロンドンで破産した商社があります。後の業務検査のさいに次のようなことが発見されました。マンチェスターに1つの商社があり、カルカッタにもう1つの商社があります。この両者がロンドンのある商社のもとに20万ポンドの信用勘定を開設しました。すなわち、このマンチェスターの商社の取引先が、東インドの商社 [つまり上のカルカッタの商社] にグラスゴウやマンチェスターから商品を委託販売で送り、ロンドンの商社あてに20万ポンドまでは手形を振り出すことができる力をもつことになりました。同時に、カルカッタの商社の方もロンドンの商社あてに20万ポンドまで手形を振り出すという理解がありました。これらの手形がカルカッタで売られ、その受取代金で他の手形が買われ、それがロンドンの商社に送られて、グラスゴウから振り出された最初の手形を支払うことになっていました。こうして、この取引によって60万ポンドの手形が創造された [ところだった] のです。」 第971号 [の質問から]。「いまは、カルカッタの1商社が船荷を買って、ロンドンの取引先あてに振り出したその商社自身の手形でその代価を支払い、そしてその船荷証券をわが国に送りますが、[こうした船荷証券は、6週間以内に当地に到着するのに、商社自身の手形は彼らの取引先に10か月の期間で振り出されます。] 送られてきたこうした船荷証券はすぐに商社にとってロンバード・ストリートで前貸を受けるために利用できるものになります。こうしてこの商社は、彼らの取引先が支払を求められるよりも前に、8か月のあいだ貨幣を使用することができるわけです。]

- 1) 「東インド市場 (および中国市場) での大過剰取引 (1847年) [Hauptvertrading (1847) im Ostindischen Markt (u. im Chinesischen)]] → 「1847年の東インド・中国市場での眩惑 [Schwindel im ostindisch-chinesischen Markt 1847]」
- 2) エンゲルス版ではここで改行されていない。
- 3) 「リヴァプールで東インド貿易にたずさわる商人」 → 「リヴァプールのあ

42 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

る一流東インド商社の社長」

- 4) エンゲルス版ではここで改行されていない。
- 5) 「第786号」——草稿では「第730号」と誤記されている。

1321① <sup>マニド・キャピタル</sup>貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響。<sup>1)</sup>

「イギリスでは、余剰の富 [surplus wealth] の不断の蓄積〔が行なわれており〕、この蓄積は最終的には貨幣の形態をとる傾向がある。他方で、執拗さの点でおそらくは貨幣を得たいという願望に次ぐのは、利子または利潤をもたらすようななんらかの種類の投資のために貨幣を手放したいという願望である。というのは、貨幣としての貨幣はなにももたらさないからである。それゆえ、余剰資本のこのような不断の流入に並行してそれのための運用部面が次第に、また十分に拡張されて行かない場合には、われわれは社会的に、投資を求めている貨幣の周期的な蓄積に当面せざるをえないのであって、この蓄積は事情に応じて大きかったり小さかったりするのである。多年にわたって、イギリスの余剰の富を大きく吸収してきたのは国債であった。国債が1816年にその最大限に達してもはや吸収の作用をしなくなるとすぐに、1年について少くとも2,700万もの金額がそのほかの投資先を求めようになった。それに加えて、さまざまな資本返済がなされたのである。……実行するのに大資本を必要とするのでときどき遊休資本の剰余を片づけるのに役立つような諸企画は……少なくともわが国では、通常の投資先による捌け口をもたない、社会の余剰の富のこのような周期的な蓄積を片づけるために、絶対に必要なのである。」(『通貨理論<sup>2)</sup> 論評, 云々』, ロンドン, 1845年, 32ページ以下。) 同書は1845年について次のように述べている。「ごく最近の時期のうちに、物価は不況の最低点から跳ね上がってきた。……コンソル公債は額面価格に達している。……イングランド銀行の地下室にある地金は数か月にわたって、同行設立いらい同行が保有した蓄蔵貨幣のどの量をも越えている。あらゆる種類の株式の価格が、平均して、軒なみまったく空前の高さにあり、利子

はほとんどあるかないかの率にまで下がってしまった。[もしもこれらのことが、] イギリスにはいまた、遊休している富の大量の蓄積が存在しているということ、投機的な興奮の時期がまたもや近づいているということ、の証拠 [でないのだとしたら]、云々。 (同前, 36ページ)

「地金の輸入はけっして外国貿易の利得の確実な標識ではないけれども、もしほかになにか説明できる原因がない場合には、地金輸入の一部分は一見して明らかにそのような利得を表わしている。」(ハッバード(J. G.)『通貨と国民』、ロンドン、1843年、[40—] 41 ページ。)「かりに、事業はしっかりしており物価は程よく通貨もゆとりある時期に、たまたま凶作のために500万の地金が輸出されて同額の穀物が輸入されることになったとしよう。通貨 [Circulation] [ ] (?) [「」は同じ額だけ減らされている。] 個人々人はまだ前と同じだけの通貨をもっているかもしれないが、取引銀行にある商人の預金も、貨幣ブローカーのもとにある銀行業者の残高も、銀行業者の金庫にある準備金も、すべて減っているであろう。そして、遊休資本の額のこのような減少の直接の結果は、利子率の上昇、たとえば4%から6%への上昇であろう。事業の状態は健全なのだから、信頼は動揺しないであろうが、信用はより高く評価されるであろう。」(同前, 42ページ。)「商品価格が一般的に下がれば、過剰な通貨は預金の増加となって銀行業者に還流し、遊休資本の豊富が利子率を最低限にまで引き下げる。そしてこうした状態は、ふたたび物価が上昇し事業が活発化して、それが休眠通貨を動員するようになるか、またはそれが外国の証券や外国の商品への投下によって吸収されるようになるまで、続くのである。」(同前, 68ページ。)/

- 1) 「貨幣資本の蓄積とそれが利子率に及ぼす影響。[Accumulation of moneyed Capital u. Einfluß derselben auf d. Zinsrate.] → 「第26章 貨幣資本の蓄積、それが利子率に及ぼす影響 [Akkumulation von Geldkapital, ihr Einfluß auf den Zinsfuß]」ここからエンゲルス版の第26章が始まる。1894年版では、目次では Geldkapital と ihr とのあいだがコンマであるのに、本文の表題ではセミコロンとなっている(こういう例はほかにもある)。彼の死後の諸版は、目次のほうに従っているわけである。
- 2) 「理論」——草稿では、誤って「問題」となっている。

/321/② 1846—47年。飢饉の結果、食糧の大量輸入が必要となった。<sup>1)</sup>  
〔議会報告書『商業的窮境』, 1847—48年。第648号。〕「輸出にたいする輸入のきわめて大きな超過が生じました。……そのために銀行では著しい〔正貨〕流出が生じ, また, 割引ブローカーやその他の関係者のもとには手形割引の申し込みが増加しました。ブローカーたちはそれまでよりも厳しく手形を吟味しはじめました。商社への信用供与の削減はきわめて深刻なものとなり, 弱い商社は破産しはじめました。まったく信用に頼っていた商社はつぶれました。これは, すでにそのまえから感じられていた恐慌状態〔Alarm〕を増大させました。銀行業者やその他の関係者は, 自分の債務を果たすために自分の手形やその他の有価証券〔money securities〕を銀行券に換えることを, それまでと同じ程度の確実さであてにできなくなっていることに気づいて, 自分の信用供与をさらにいっそう削減し, 多くの場合それをまったく拒絶しました。多くの場合, 自分自身の債務を支払うために, 彼らは自分の銀行券をしまいこみました。彼らはそれらを手放すことを恐れていました。恐慌状態と混乱は日々大きくなっていましたので, ラッセルの書簡がなかったら一般的な破産が生じたでしょう。) (『商業的窮境』, 1847—48年, 74, 75 ページ。語っているのは, リヴァプールの東インド〔貿易〕商人, チャールズ・ターナである。)<sup>2)</sup> [第730号。]「多くの商社が大きな資産をもっていました, しかしそれらは換金可能〔available〕ではありませんでした。彼らの資本は全部, モーリシャス島の地所やインディゴ工場や砂糖工場に固定されていたのです。50万—60万ポンド<sup>3)</sup>の負債を負ってしまうと, 彼らは自分の手形を支払うための換金可能な資産をもっていませんでした。そして結局, 彼らが自分の手形を支払うのに, まったく彼らの信用に頼っているのだということがわかりました。」(同前, 81ページ。)<sup>4)</sup>

第1664号。(S. ガーニ, ロンドンのビル・ブローカー) (同前)<sup>5)</sup>「現在〔 〕 (1848年) [「], 取引は制限され, また貨幣は非常に過剰になっています。」 第1763号。「私は, 利子率がこんなに高くなったのは資本の不足

のせいではなくて、恐慌状態 〔銀行券を入手することの困難〕 のせいだったと思います。」

〔第2675号。〕「1847年には、輸入された食糧の代価として、少なくとも900万ポンドの金が（750万はイングランド銀行から、150万はその他の源泉から）輸出されました。〔 〕」（同前、245ページ。）<sup>61）</sup> {<sup>7）</sup>〔第3800号。〕「1847年10月23日には、公債および運河・鉄道株はすでに114,752,225ポンド減価していました。〔 〕」（同前、312ページ。モリス、イングランド銀行総裁。） 第3846号。（同じモリスがロード・ベンティンクに尋ねられる。）「あなたは、債券やあらゆる種類の生産物やに投下されていたすべての資産が同じように減価したということ、原綿も生糸も未加工羊毛も同じ低落価格で大陸に送られたということ、そして、砂糖やコーヒーや茶が強制売却で投げ売りされたということ、ご存知ではないのですか？——食糧の大量輸入の結果生じた地金流出に対抗するためには、国民がかなりの犠牲を払うこともやむをえませんでした。」 第3848号。「そのような犠牲を払って金を取り戻そうとするよりも、イングランド銀行の金庫に眠っていた800万ポンドに手をつけるほうがよかった、とは考えられませんか？——いや、そうは考えません。」このヒロイズムへの注釈。ディズレイリが W. コットン（イングランド銀行理事、前総裁）に尋ねる。第4356号。「1844年に銀行株主に支払われた〔配当〕率はどれだけでしたか？——その年には7%でした。〔 〕」 第4357号。〔「〕では、1847年の配当は？——9%です。〔 〕」 第4358号<sup>62）</sup>。〔「〕銀行は今年株主に代わって所得税を支払うのですか？——そうです。〔 〕」 第4359号。〔「〕1844年にはそうしましたか？——そうしませんでした。〔 〕」 第4360号。〔「〕それならば、この条例は株主に非常に有利に作用したわけですね？〕」 第4361号。〔「〕結果は、この条例が通過してから株主への配当は7%から9%に上がり、条例以前は株主が支払っていた所得税もいまでは銀行が支払うということですね？——まったくそのとおりです。〕 /

46 「信用と架空資本」(『資本論』第3部第25章)の草稿について(中)

- 1) ここまでのところは、エンゲルス版では次のようになっている。「次の抜き書きは再び『商業的窮境』に関する議会報告書、1847-48年、から取ってきたものである。——1846-47年の凶作と飢饉との結果、食糧の大量輸入が必要となった。」
- 2) このパーレン( )のなかの部分はエンゲルス版ではパーレンなしに次のように書かれている。「ラッセルの書簡は銀行法を停止させた。——前にあげたチャールズ・ターナは次のように述べている。」
- 3) 「50万—60万ポンド」——私のノートの誤りでなければ、草稿では「5万—6万 [5—60,000 ₤]」と誤記されている。
- 4) エンゲルス版ではここで改行されていない。
- 5) 「第1664号。(S. ガーニ、ロンドンのビル・ブローカー) (同前)」→「前記のS. ガーニ。——」
- 6) エンゲルス版ではこの部分は引用符をはずして掲げられている。証言では第2675号で述べられたあと、第3645号で「私はこう言いました」として要旨が繰り返されているが、マルクスは前者から引用しているものと思われる。MEW版で出典ページが「301ページ」となっているのは、後者のページである。旧インスティトゥート版では「204 [277] ページ」となっているが、「204ページ」が前者、「277ページ」が後者にあたる。MEW版と旧インスティトゥート版とのページの違いは、MEW版ではマルクスが使用した大英博物館の綴込本のページを記しているのに対して、後者は報告書そのもののページを記していることによる。綴込本によるとしても、ここでは「301ページ」ではなくて、草稿(および1894年版)の「245ページ」を取るべきところであろう。
- 7) この括弧(草稿では角括弧)に対応する閉じ括弧は見あたらない。エンゲルス版ではここに、「イングランド銀行総裁モリス。——」とある。
- 8) 「第4358号」——草稿では「第4359号」と誤記されている。

/321/③ 《銀行業者による退蔵。<sup>1)</sup>》 第4605号。(ピース氏。)  
「イングランド銀行が利子率をさらに引き上げざるをえなくなったので、だれもが不安になっているようでした。地方銀行業者は〔 〕 (1847年に)〔 〕手持ちの地金の額を増やし、また自分の銀行券の額を増やしました。そして、平素はおそらく数百万ポンドの金および銀行券を手持ちしているのを常としていた私たちの多くが、たちまち数千ポンドを金庫や引出しのなかにしまいこみました。というのは、割引についても、われわれの手形が市場で

流通できるかどうかについても、不安が広がっていたからで、これに続いて一般的な退蔵が起こったのです。〔 〕/

- 1) 「銀行業者による退蔵 [Hoarding durch d. Bankers]。」→「1847年の恐慌中の諸銀行の貨幣蓄蔵について、地方銀行業者のピース氏は言う。」

/321/④ 第4691号<sup>1)</sup>。「それでは、12年このかた、その原因がなんであったにせよ、結果は、生産的階級一般にとってよりも、むしろユダヤ人や貨幣取扱業者にとって有利だったのです [ね?]<sup>2)</sup>/

- 1) エンゲルス版ではこの番号の前に、「ある委員は言う。——」と書かれている。  
2) この引用の左側にはインクで太い縦線が引かれている。この引用の前の行は右までいっぱい書かれており、この引用は左端から書き始められているが、この縦線を手がかりに改行と見なしておく。

/321/⑥ 資本の価値。第4777号。「資本の価値について言えば、それは信用欠乏 [discredit]の問題であって、〔資本の〕不足 [scarcity]の問題ではないでしょう [?]<sup>1)</sup>/

- 1) このパラグラフはエンゲルス版では抹消されている。

/321/⑥ 信用の容易さ(貨幣の豊富さ)。第4886号。(ガードナ、マンチェスターの紡績業者、製造業者、そして商人。)「窮境は、第1に、貨幣の豊富さ、あるいはむしろ信頼の豊富さから、またわれわれが非常に容易に割引させることができたということから生じたものと考えます。支払期限まで6か月ないし8か月あったほとんどどんな種類の手形でも、非常に容易に3%および3 $\frac{1}{2}$ %で割引かれることができました。そして以前の経験のすべてが、いつの場合であろうと、それが逆の結果を生み出すことを



証明してきました。」第5080号。「生産〔 〕(製造業の)〔 〕は1847年には3分の1だけ減少しました。」<sup>1)</sup>/

1) このパラグラフはエンゲルス版では抹消されている。

/321/⑦ 逼迫期に貨幣取扱業者がどんなにはげしく暴れまわるかについて、トゥックは次のように言っている。<sup>1)</sup> 第5451号。《1847年に》「ウォーリックシャヤスタフオードシャの金属製品業では、非常に多くの商品注文が断われましたが、その理由は、製造業者が自分の手形の割引のために支払わなければならなかった利子率が彼の全利潤を呑みこんでしまうよりも高かったからです。」/

1) この文の原文は次のとおりである。Wie sehr in Zeiten of pressure d. money dealer wüthet: Tooke spricht: エンゲルス版では次のようになっている。「貨幣取扱業者が恐慌期をどんなにはなはだしく利用するかについて、トゥックは次のように言っている。[Wie sehr der Geldhändler eine Zeit der Krisis ausbeutet, sagt Tooke aus:]」

/321/⑧ {手形が貨幣の介入なしに役立つ仕方はきわめて簡単である。Bに手形を支払わなければならないAは、Bに自分の取引銀行業者あての為替手形を与え、Bはこの為替手形を自分の取引銀行業者に払い込む。そしてこの両方の銀行業者が為替手形を交換し合い、相殺するのである。{もしAとBの両方が同じ銀行業者と取引をしているならば、過程はもっと簡単である。} [ ] }<sup>1)</sup>/

1) このパラグラフは削除されている。

/321/⑨ 通貨 [Circulation], 貨幣, 資本。「铸貨または貨幣のうちで、公衆の手のなかにあつて、商品の交換をなしとげること

部分だけが通貨〔Circulation〕の名に値いすることは明らかであり、それに対して、銀行業者または商人の手のなかに眠っていて、有利な投資の機会を求めているすべての鑄貨または地金は資本である。——資本、それは、節約原理の導入によって永久にか、あるいは、通貨〔circulation〕の必要が減少する、1年のうちの特殊な時期に、一時的にか、流通から引き揚げられることがありうる。」(『ジ・エコノミスト』, 1845年度, 238 ページ)「そして、預金が短期のものであり、いつでも預金者が自由に使えるからといって、なんらかの点で過程が変えられるわけではない。というのは、それがだれかによって引き出されるとしても、それは他のだれかによってもとにもどされるのであって、||322|一般的平均はあまり変わらないからである。」(同前。)<sup>1) / 2)</sup>

1) このパラグラフは削除されている。

2) このあと草稿では、『銀行法委員会報告書』1857年、におけるノーマンとオーヴァストウンとの証言の抜き書きと批評 (MEW, Bd. 25, S. 432, Z. 22 以下) に移っていく。

(1983年9月17日)

付記——本稿作成にあたり、谷川宗隆氏から文献閲覧に関する御厚意を得た。記して謝意を表する。